

関山

かんざん

第19号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア

求法巡禮

風景の心

慈覚大師円仁と下野・みちのく

喫茶去（お茶を 一服どうぞ）

茶道裏千家鵬雲斎玄室大宗匠様による
献茶式によせて

慈覚大師報恩法要について

平成二十五年西行祭短歌大会記念講演（概要）

「人生の歌・歌の人生」 講師 小高 賢

祖師先徳鑽仰大法会

慈覚大師一一五〇年御遠忌比叡山参詣旅行

「心・技・体」を育てる

特別対談

「中尊の釈迦」

中尊寺職員研修旅行 報告

福岡宗像大島と

大分国東半島三日間の旅

日本照明賞受賞報告

風信・語録 「久遠の鐘」

貫首 山田 俊和 6

壬生 真康 9

千田 孝明 15

佐々木邦世 20

清水 広元 24

中尊寺法務部 25

千葉 和夫 36

館下 光利 40

多田 孝文 46

山田 俊和 51

菅原 光聰 54

中尊寺文化財管理部 57

戸田 昌征 58

関山植物誌（5）

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

御詠歌の深み

新刊紹介

資料紹介

関山句囊・歌籠

御神事能番組

陸奥教区宗務所報

執務日誌抄

御奉納者御芳名

浄財御奉納者御芳名

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

不動尊篤信御奉納者御芳名

〔表紙〕 中尊寺開山堂「慈覚大師坐像」

本尊は昭和三十六年（一九六一）、故西村公朝師が美術院国宝修理所長として金色堂諸仏修理のため来山された際、中尊寺の依頼によって造像された。大師が入滅した貞観時代の古様を取り入れて彫像された昭和の尊像である。詳細は西村公朝師「慈覚大師像を彫る」（本誌創刊号 一九九四・十）参照。

破石 晋照 61

清水 真澄 62

佐々木邦世 63

65

75

83

84

86

96

96

96

98

98



慈覚大師報恩法要「念仏会」



金澤翔子さんによる席上揮毫 (4/13)



本堂新本尊開眼法要 (3/24)



狂言「いろは」
一山子弟北嶺航君初舞台 (5/5)



「花まつり」
天台宗マスコットしょうぐうさんと (4/14)



丈六釈迦如来像開眼・東日本大震災物故者追善供養献茶式 (4/28)



ケネディ駐日米国大使来山（11/26）



平泉ユネスコ協会文化財愛護少年団が
中尊寺にて平和の鐘を打鐘（8/15）



秋の藤原まつりにて、地元園児達による「謡」の発表（11/3）



陸前高田献花台にて慰霊法要（3/11）



平成26年節分会 隠岐の海関を迎え、盛大に行われた（2/2）

求法巡禮

中尊寺貫首 山田俊和

平成二十五年は、天台宗祖師先德鑽仰大法会期間中の、慈覚大師一千五十年御遠忌祥当の年です。中尊寺は、毛越寺・立石寺等と共に、嘉祥三年（八五〇）慈覚大師円仁によって開山されました。円仁は、延暦十三年（七九四）栃木県下都賀郡岩舟町で壬生氏に生を受け、七十一年の生涯でした。大慈寺広智師の導きで仏門に入りました。十五才で比叡山に登り伝教大師最澄の弟子になり、大乘仏教、法華一乗の精神を受け継ぎます。更に十年間の入唐求法中に、天台教学・密教・念仏等を学びました。

釈尊が説かれた「一切衆生悉有仏性」「草木国土悉皆成仏」の教えは、最澄によって「法華一乗の精神」として顕現され、更に円仁によって「出家も在家も、共に悟りに至り、共に成仏する」という、大乘仏教の真髄に至ったと言えます。

その教えを学んだ、藤原清衡公は、天治三年（一一二六）中尊寺創建に当り、願文に「抜苦与樂普皆平等」「諸仏摩頂場」と述べて、生きとし生けるものの往生極楽を願い、浄仏国土建設に邁進したのです。

中尊寺では、この千載一遇の機会に、慈覚大師円仁のご遺徳宣揚のため、ご尊像を本堂に奉安して法会厳修し、十月六日には、僧俗一体となり念仏会を修行するなど、多くの方々と仏縁を結びました。また四月二十八日には、裏千家鵬雲齋玄室大宗匠による、慈覚大師報恩・中尊寺本堂本尊丈六釈迦如来尊像開眼・東日本大震災物故者追善献茶式が、多くの方々の参加のもと盛大に挙行されました。

慈覚大師一千五十年御遠忌の、中尊寺報恩行の第一は、三月二十四日の中尊寺開山日に、宿願でありました本堂本尊丈六釈迦如来像を、天台座主猊下御名代毘沙門堂門跡門主叡南覚範大僧正御親修のもと、約七百年ぶりに奉安できたことです。

慈覚大師は、法華経修学の道場として中尊寺を開山され、釈迦如来像を安置されました。藤原清衡公は、中尊寺創建にあたり、願文の冒頭に「安置し奉る、丈六皆金色釈迦三尊像各一体」と述べています。残念ながら、延元二年（一一三七）火災にて失われ、今日に至っておりませんでした。

今般奉安された釈迦如来像について、多田孝文師は、「この本尊は、法華経如来寿命品による、三身具足の釈迦如来で、それは、常寂光土 第一義諦（報身）久遠実成 靈山淨土（法身）多宝塔中 大牟尼尊（応身）という長い名前で、まさに天台の本尊です。」と述べられています。

説法印を結ばれたお姿は、慈悲にあふれ、参拝者の恐れ、悩み、悲しみを取り除き、諸願を満足させて下さることを示しています。この本尊造立は、多くの方々々の信心の賜です。靈山淨土の主として、いつでも、いつまでも、参拝者を導かれることでしょう。

「風景の心」

壬 生 真 康

浅草寺では除夜の鐘の点打も無事に執り行われ、新春がまた巡ってきました。

東京も節分が明けるまでは最も寒い季節を過ごすこととなります。年明けとともに初詣の参拝の方々の声が浅草の風景を彩ります。

浅草寺の除夜の鐘は境内の弁天山に築かれた鐘楼で撞かれます。昭和二十二年以降はご信徒の間で「百八会」という組織が作られ百八人の会員の方が午前零時の僧侶による捨て鐘の後に順次、点打します。時を同じくして本堂では新年の初祈祷が厳修され、外陣、内陣には初詣の参拝者の祈りの声が響き渡ります。浅草の初春はこうして、一月中に三百万人を優に超えるご信徒の思いとお迎える浅草寺参道、仲見世を始めとする地元の方々の努力が相俟^あって「新年大祈祷会」の情景を



除夜の鐘





除夜の鐘

醸し出してゆきます。

さらに節分、立春を迎えて若草が東京の春を告げ、まもなく浅草寺ご本尊の観世音菩薩が推古天皇三十六年（六二八年）にご示現された縁起に因む示現会の法要が三月十八日に厳修されて、早くも桜の時節が到来することとなります。浅草の春の風景は年明けの鐘の音に始まって人の息吹と花との交響の場となっているのです。季節ごとの行事によって私たちが日々暮らす地域が歴史や文化の深みを再現した風景に一種の「化学変化」をしてゆくのです。

風景とは自然そのものとは異なる意味を持つ言葉です。何よりも大切なのは人間の営み、あるいは人間と自然や環境との関わりが風景の成り立ちには欠かせないと言うことです。

そして風景には「光」が充ちています。白川静氏の『字通』によれば「景」の意味の根本は「光」なのだそうです。そういわれてみると西洋の近代的な風景画には光の処理がきわめて特徴的に施されています。

昨年末、上野にある東京都美術館で開催された「ターナー展」を見てきました。ターナーは十九世紀に活躍したイギリスの画家で、現在でも最高の芸術家であるとされています。彼の画業は風景をどのように深く表現できるかを追い求めたもので、自然の崇高が人間に与える畏怖に価値を見出して、風景そのものを自己の芸術表現の手段にまで高めました。それまでは宗教画や人物画が中心だった西洋美術の中で風景画を重要なジャンルとして確立したのです。

東洋では、早くから人間と自然との親しい関わりが受け入れられており、風景画が絵画の伝統の中心になっていました。山水画がその代表です。山と川だけが描かれているようであっても実は、山水が世俗を超越した宗教的な象徴とされており、しかもヨーロッパ的な感覚では自然が「神」の全知全能を表す人間と隔絶した対象となっているのとは異なり、人間が自然の中に没入する境地を理想として風景画が発展してきたことを示すものです。

山水画においても「光」の表現は極めて重要です。絵の中で光がどの方向から射しているのかを確認したうえで鑑賞することによって初めて見えるものがあるといわれています。風景画における光は人間の生命と呼応しあう力の表現に他ならないのです。

これは風景という言葉が客観的な自然と同じではなく人間と自然環境との相互の働きかけを前提にしていることを表しており、別の言い方を借りれば、風景は「世界」を描き出しているのです。なぜならば、仏教の見方に立てば「世界」とは衆生が住む時間と空間のことだからです。

人間らしさが溢れた風景画といえは江戸時代の浮世絵に見られる名所絵が思い浮かびます。江戸浮世絵の発展の歴史では後期に当たる天保年間に役者絵や美人画に代わって葛飾北斎の「富嶽三十六景」や歌川広重の「東海道五拾三次」、「名所江戸百景」が新時代を切り開きました。北斎はその頃もたらされた西洋風の絵画表現を積極的に取り入れ、斬新な構図の風景画を創造しましたが、

北斎・広重の風景画がその後ヨーロッパの美術界に大きな衝撃と影響を与えて「ジャポニスム」が一世を風靡したことはよく知られています。

名所絵の成立の淵源を遡れば「歌枕」に行き着きます。歌枕は古くから和歌に詠まれた名所であって、日本の美意識の源流と考えられます。

松尾芭蕉が貞享四年（一六八七年）に詠んだ

花の雲 鐘は上野か浅草か

の句は弁天山の鐘楼が寛永十九年（一六四二年）に炎上した後、元禄五年（一六九二年）にかつての鐘が改鑄される以前の音を詠んだものと考えられています。西行法師を敬愛する芭蕉が

まがふ色に花さきぬればよしの山

春は晴れせぬ嶺の白雲

という西行の歌を思い、桜に関する歌枕の代名詞ともいえる奈良の吉野で花を詠もうとして実際に吉野に赴いたものの、その桜の美をついに句にすることができなかったといわれます。その事実を知ってあらためてこの句を読み直せば、その趣きもまた違ってくるのではないのでしょうか。

上野の寛永寺の鐘か、あるいは浅草寺の鐘なのか、春の花の盛りの空の下に芭蕉の住まう深川の地にまで音が響きます。江戸の市井において人々の毎日の生活に規律を与える時の鐘は確かに寺の鐘楼から発せられる響きですが、一度自分というものを捨てて、耳を澄ませてみるならば、鐘の音は浅草でも上野でもなく、日常の世界を超えた大きくて深い別の次元、聖なる場所から届けられてきたように聴きなすことができます。

都市のただ中にある寺院はおのずから聖と俗の間を行き交う人々の特別な空間であり、季節の到来ごとに地域では孜孜として永くさまざまな行事が繰り返されてきました。行事の遂行の中で地域の人々が共に生きる時間は一人一人の一度限りの大切な人生が同時に歴史的で社会的な枠組みの中にあることを実感させてくれます。しかもそれは「世界」を成り立たせる、より大きくて深い場所

にまで達しているのです。
「三社祭」は現在では浅草神社の祭礼として五月の半ばに行われています。しかし、明治初期の

神仏分離までは浅草寺境内の三社権現の祭礼として、一時の例外を除けば三月十八日に執り行われていました。今日でも前述のように、ご本尊観世音菩薩ご示現の当日に示現会の大法要が営まれ、この日限りの「紅札」が授与されます。また、当山に伝わる「浅草寺縁起」に因み、浅草寺三寺舞の一つである「金龍の舞」が昭和二十四年以降地元有志の方により奉演され、ご詠歌の講中の方による奉詠も行われます。法会の荘厳と観光の華麗が相乗効果をもたらし、「花の雲」に一層の彩りを添えています。

こうした行事に際してご信徒、参拝者、地域の関係者のみでなく、広く浅草を訪れる観光客の方々にも関心をもっていただくことが、そのまま観音様との結縁となっていくことはいまでもありません。仲見世や浅草観光連盟の方々の地域振興の努力はいまでもなく、一昨年隣接する墨田区に建設された東京スカイツリーの力強さを内に秘めた癒やかな姿は、国内のみならず海外に向かつて、遙か遠くまでに届く眼差しをもった呼び



本尊示現会 金龍の舞

かけとなっています。

鐘の句を詠んだ二年後、元禄二年三月に深川を発つて「おくのほそ道」の旅に出た芭蕉は四月末に白河の関を越えました。須賀川で

風流の初めや おくの 田植え歌

という発句を詠み、随行の曾良、土地の等躬の三人で連句を巻きました。芭蕉にとって最も大切な「風流」あるいは「風狂」を最初に感じたのは、人々が遠い昔から伝えてきた田植えの行事が行われている風景だったのです。そして芭蕉が俳人としての生涯をかけたこの旅は五月九日に松島に入り、その十三日には平泉に達し、杜甫の

国破山河在 城春草木深『春望』

を踏まえた

夏草や 兵どもが 夢のあと

五月雨の 降り残してや 光堂

の句を詠む道程にまでつながっています。

江戸の隅田川も奥州の衣川も古来、歌枕として人の思いに満ちた場所であり、その歴史をたどった芭蕉の句で詠まれているのは人の世の出来事、

歴史の重みをいっばいに背負って、しかも「世界」を超えた深み、広がりである虚空にまで音と光が残響、残光を湛える風景なのです。伝えられてきた文化、伝統を行事の遂行の中で大切に守り、あるいは訪れる人たちとの真の絆を新たに創造しようとする人々の思いの結晶が、その風景に心を与えてくれます。

プロフィール

みぶ しんこう

聖観音宗参務

浅草寺教化部執事

「慈覚大師円仁と下野・

みちのく」

千田 孝明

慈覚大師円仁の生い立ちは、「俗姓 壬生氏、下野国都賀郡の人で、延暦十三年（七九四）生まれ。父をやく喪い兄から外典を学び、大慈寺の広智のもとで修学し、十五歳の時に広智に伴われて比叡山にのぼり最澄に師事した。」というのが定説であろう。

ところが、宮内庁書陵部と京都三千院の二箇所
に所蔵される『慈覚大師御縁起』は全く異なる生
い立ちを説いている。成立年次は不明だが、二本
の内容は大筋一致しており（書陵部本は後半欠
失）、三千院本は宝徳二年（一四五〇）の写本な
ので、室町期までにはある程度巷間に流布した伝
記説話なのだろうか。

その内容は、

「奥州シノ部ノ郡（忍の里）、赤卒都婆という所の趣（超）智大夫武俊という貧者夫婦に晩年子が授かった。泥中の蓮、砂中の金の如き非凡の才能をわが子に見いだした武俊は、将来僧侶にすべく七歳の時奥州光明寺の実証阿闍梨の下で修学させたが、十三歳のころには比類なく優秀で師匠も教えることがなくなるほどであったという。

ある時、子は父母を恋しく思い家に帰ると、武俊は叱責して光明寺に追い返したが、師の実証が仏法最頂の延暦寺で学文することを勧めたため、武俊は子連れて登叡した。すると文殊菩薩の化身の少年が登山する夢告を得て待っていた宿老たちにありがたく迎えられる。親子の涙の別れをして帰郷した武俊は、妻の失踪を知り、悲嘆のあまり失明落魄。やがて子の与えた白小袖が縁で出家した子にめぐり合い救われて往生し、一方老母も高僧となった子に再会、後生を全うしたという。この子こそが日光山を開き、東土に仏法を弘めた慈覚大師のことである。」

というものである。

十五歳で親子骨肉の愛を絶って遠く比叡山にのぼり出家修行し高僧となった慈覚大師円仁に仮託して生まれた説話物語と思えるが、奥州生まれで、幼少のころ奥州の寺院で修学し十代半ばで比叡山にのぼり、後に日光山を開いたことに言及している点が注目される。

◆ 同様に、慈覚大師の伝説で、東北地方と日光山をつなぐものがある。群馬県太田市世良田せらだの長楽寺に所蔵される永徳三年（一三八三）正月十四日（慈覚大師の忌日）付の慈覚大師画像の画賛（写真参照）は、通常の下野生まれの生い立ちから帰



慈覚大師画像
群馬県太田市長楽寺蔵

寂までのことを簡明

に記したのにつづけて「叡山の花芳の峰に沓くわ片足を留め、その日空中に昇り東方に向かい、その日下野州日光山を供養し、その日羽州立石寺に入定した。」とある。

◆ 同じような伝説は、『山門建立秘訣』や『山門秘伝見聞』などにもみられ、十三〜四世紀頃には成立していたようで、江戸時代の宝永元年（一七〇四）に比叡山の学僧秀雲が『通行本伝』を刊行するさいに記した序文の中にもその完成形が見てとれる。

こちらの伝説は、生誕地ではなく入定の地として東北地方が宛てられているという違いがあるが、日光山での足跡をともなっている点で共通している。



画賛

◆ その日光山には古来慈覚大師の来山伝説があるが、その根拠となっているのが『円仁和尚入当山記』である。

嘉祥元年（八四八）四月十六日、円仁は日光に來山し、中禅寺に上り神宮寺に参籠すること七日間、中国より伝持した金剛頂經・蘇悉地經などを施入し、中禅寺湖の南岸の出島に薬師寺を創建、山内地区滝尾の麓に山王権現を勧請、さらには本地神宮寺（すなわち三仏堂）を建て、日光三所権現の本地仏を祀り、恒例山の南麓には、常行・法華の二堂を建て、野口生岡の地に山王を勧請したことなどが記されている。

◆ 斉衡二年（八五五）正月、上毛野権講師尊鎮そんちんの撰文となっているが、日光山に常行堂が建立された久安元年（一一四五）以後に、慈覚大師に仮託して常行堂建立伝説が成立したと考えられるので、年紀・撰者については真とすることはできない。

日光山はもともと勝道上人の開山伝説があり、

◆ その上に弘法大師空海の来山伝説（真言系）と慈覚大師円仁の来山伝説（天台系）が加わって日光の信仰形態が進展してきた歴史がある。

◆ 東北地方における慈覚大師の開山伝説は、正嘉元年（一二五七）に住信が著した『私聚百因縁集』に「化道は遙かに東夷の栖を過ぎ、利生は遠く北狄の境に及ぶ。いはゆる出羽の立石寺、奥州の松島寺等なり。」とあるように立石寺や松島寺（瑞巖寺の前身）開山のことが十三世紀半ばには語られている。

◆ 中尊寺における慈覚大師の開山伝説も、弘長二年（一二六二）四月一日付の座主下知家（瑠璃光院文書）に「慈覚大師開山」の文言がみられるので、やはり鎌倉中期までにはとなえられていたのであろう。

◆ 慈覚大師の東北地方巡錫の具体的な史料は皆無といって良いが、唯一『慈覚大師伝』によると、先師最澄の示寂後、円仁は最澄が定めた十二年籠

山行に入ったが、六年後に山上の人々からこぞつて懇請され、やむなく山を下りて奈良法隆寺で『法華経』を講説、翌年の天長六年（八二九）には大阪四天王寺で『法華経』と『仁王経』を講経した後、

「遙かに北土に向かつて妙典を弘暢す」

「『通行本伝』」

「是より以後、北狄に向かつて妙典を宣暢す」

（『三千院本伝』）

と記されている。

「北土」・「北狄」を東北地方と解せば、法華経の教えを弘めるために東北地方に円仁が出かけたことになる。

もし、そうだとすれば、天長六〜七年頃の陸奥・出羽の両国では疫病が流行して多数の死者を出し、天長七年正月三日、出羽国大地震が発生し、秋田城郭官舎や四天王寺の丈六仏像や四天王堂舎などが倒壊し、多くの死傷者が出ていた状況を目の当たりにした可能性がある。

この時の大地震と疫病の猖獗は朝廷を深く憂い

させ、大極殿において百僧による七日間の『大般若経』転読を命じたり、救急の勅命を発するなど懸命に沈静祈願や救済活動を行っている。

円仁の東北行きが事実であったとすれば、天台の教義である『法華経』の弘法に心をくだいていた円仁が、東北のこうした状況を知って、生まれ故郷を経てさらに東北の地に向かつて旅立ち、病氣や災難に苦しむ人々の心の救済と死者の追悼をかねて布教の巡錫を行ったということになる。

出羽国には、円仁が生まれた下野国の梁田郡、安蘇郡、芳賀郡と同じ地名が最上郡の郷名に見られる。これは下野国の各郡の百姓が出羽国の最上郡に集団で移住させられ、集落が形成されて郷名となったといわれている。立石寺は安蘇郷に属しているのでその付近は下野国生まれの人々やその子孫が多く居住していた地であったと思われる。

また出羽国には承和十一年（八四四）に出羽国講師として安恵が赴任している。安恵は円仁と同じく下野国生まれで少年時代都賀郡の大慈寺で広

智に師事し、やがて比叡山にのぼり最澄の門弟となり、最澄没後に円仁の弟子となった人物であり、彼の赴任によって出羽をはじめ東北地方への天台宗の布教が格段に弘まったであろうことは、容易に想定できよう。

下野国を出身とする人々の土壌がある地に下野生まれの高僧が赴任したことで、親近感をもって迎えられる、当時未だなじみの薄い天台の教えへの理解が深まり、ひいては同じく下野生まれの円仁への畏敬の念を生み出すものとなったのではなからうか。

円仁に東北地方への強い想いがあったとすれば、それは円仁の生まれた環境に起因するかもしれない。

『熊倉系図』では、円仁の父首麻呂は東山道の三鴨駅長であったと記され、『私聚百因縁集』の「或伝」で、円仁を「都賀郡の関守が子なり」とし、『八雲御抄』では「みかほの関」を円仁の誕生地としている。

円仁が東山道の駅長の子、もしくは関守の子であったとの伝を受けとめると、畿内と東北地方を結ぶ幹線の拠点に近い環境で、双方の人的交流や物流などを間近に感じ畿内や東北の地へ往来する人々に触れる機会もあって、遠隔地の動向に関心を寄せるように育っていたのかもしれない。そしてそれが、後に叡山に上り東国・東北の地に巡錫する動機になったともいえようか。

慈覚大師円仁と下野・みちのくを結ぶ導線は、円仁自身の生まれ故郷への郷愁の上に、東国・東北地方に向ける法華経弘法と人民救済の念と、下野・東北の人々からの深い敬慕の念が交叉して長い時を経て形成してきたものといえるのだろう。

プロフィール

ちだ こうみょう

日光市観音寺 住職

元栃木県立博物館人文課長。

「慈覚大師円仁とその名宝」展、「天海僧正と東照権現」展、「聖地日光の至宝」展などの展覧会を企画担当。

喫茶去

きつたこ
〈お茶を 一服どうぞ〉

佐々木 邦世

先ごろ、川勝平太氏をお迎えした。前日、一関で世界文
化遺産フォーラムがあり、基調講演を聴かせていただいた。
この日は平泉を、毛越寺から中尊寺へと回られる。

氏は、一関市内にある「北上川リバーカルチャー」の顧
問として、はやく、静岡県知事になる前から私も存じあげ
ていたし、原稿執筆をお願いしたこともあった。そして、
東日本大震災の後、全国知事会から氏が岩手支援の方途を
託されて、遠野市に來られたことも聞いていた。

本堂の新たな丈六釈迦如来像をゆつくりお参りしてい
だいてから、お茶室・松寿庵に案内した。
和やかな挨拶のあとに、清談、こんな話になった。

昨日、お話のあいだに、こちらの御本尊が阿弥陀さま

かと思っていたら、釈迦如来であつたということをはじめ
めて識つた、と話されていましたが、ただ今ご覧いただ
いたとおり、この春に開眼なつた丈六の釈迦如来像です。
左手が、正面に甲を向けた説法印の尊容です。

釈迦と弥陀と、これは、東か西か、AかBかといった
相対的な別々なもの、ではないんですね。釈迦の説かれ
る慈悲の法体(本質)が姿となつたものが阿弥陀如来と、
そう、うけとめていただければ――。

昔の人も、同じように諸仏のかかわりを思索してい
たでしょう。秀衡公の母が、平泉から比叡山に居た澄憲
という、後に「能説名才」と称された方ですが、その方
に懇望して創作してもらつた平泉オリジナルの「如意輪
観音講式」というものがありまして、それに、

「この菩薩、安養浄土には「弥陀」と号し、娑婆には
観音と現れき」

と説いているんですよ。異なるのは、人の方で、真実は
一体なんですね。法華経に説かれる釈迦も、大日如来と
不二、一体であり、西方浄土の阿弥陀如来も異なるもの

でない――と。折々、先学のお話にも触れて、自分のな
かで領けるようになるんです。

お茶をどうぞ。 みなさんも

同行の方々にも一服すすめながら、話はつづいた。

□

これも、ご講演のなかでありましたが、藤原清衡公が
前九年・後三年と長い戦乱の後をうけて、このみちのく
を「仏国土」にしようと、中尊寺建立に着手されたとい
うこと。平泉世界遺産のコンセプトになっています。

この「仏国土」を、英語でどう訳したものか、真意が
通じるにはどう訳されたらいいか、ということに言及さ
れて、

登録されたものには pure Land (真実の土) とある
けれども、どうも――。

それより、sacred Place (神聖な地)の方が好い
では、とのお話でしたね。

たとえば、この東北は、陸奥、道の奥と称されたわけ
ですが、一体、この「みちの奥」のニュアンス、意味合
いを生かすにはどう英訳したらいいか。

英語を全く話せない私が言うのも何ですが、京から遠
く離れた「遠国」でした。その歴史と、この東北の山河、
そして芭蕉の「奥のほそみち」を重ねて汲むとき、
deep East)が最もふさわしい、そう思つて、先年、
ドナルド・キーン先生が中尊寺に來られた折に、尋ねた
んです。「それで、いいです」って言つていただきました。

「仏国土」には、むしろ、人間ありのままの、そこに
即して、の意味合いがあるようにも思うのです。仏国土
の「土」は、国土交通省の「土」ではなくて、「身土一如」、
ひとりひとりのこころの風景でもありましょう。「浄土」
「仏国土」というとき、日常の自身に引き寄せて気づく
ものでしょうし、生をみつめることでしょう。

「衆生という国土、衆生を抜きにして仏国土はつくら
れるはずもない」と、『維摩経』に説くわけです。

川勝氏は、先の、Deep Eastの話を、言い得たりと大きく肯かれてから、御地、富士山にかかわることなど、世界文化遺産として、その地方がどう取り組むべきか、取り組んでいるか、いろいろ実に示唆に富むお話をされた。こちらもまた、興に乗ってこんな話もした。

駐日アメリカ大使になられたキャロライン・ケネディさんがお見えになって、木の葉散る十一月でしたが、この松寿庵で、ゆつくりされていきました。その日は、当地の裏千家の宗貞師が亭主となり、大使がお茶を戴かれますと、こう声をかけたんです。

「ケネディさん、ご自分でお茶を点ててみませんか」
傍に待っていた通訳の方が、ケネディさんが左利きだから、と声を挿んだんですが、ご本人は喜んで、教えられるように、右手で茶筌を取ったんです。

なかなか、泡が立ちません。
「もつとこう、スナップをきかせて」と、御指導よろしく、なんとかうまく、点てられまして、それを同行さ

野外の舞台で「薪能」が催行されますと、その篝火に映える情景を話したら、ケネディ大使、
「是非、わたしも八月十四日、観に来たい」。
「そのときは、ドナルド・キーン先生と一緒に御覧いただくといいですね」って、申しました。

そんな話のあと、川勝氏に先立って松寿庵を出た。

川勝氏が席を立たれた際に、私は、「帰りの車中でも読んでいただければ」と、薄い冊子を差し上げた。

『平泉を歩く』、上梓なつたばかりの、エッセイ・コンテスト入選作品集である。地元の、有志十名が会を立ち上げ、一年の準備を経て、昨年六月から三カ月間公募して、なんと、全国から二六六編の、「平泉への想い」が寄せられたという。入賞作品、二四編を収録している。

その、企画発想がいい。

全国の人が「平泉」をどう見ているのか、かつて、平泉の史跡を訪ね、あるいは季節の行事に参加したり、

れたご主人様に呈されたら、「このようなオモテナシ、生まれてはじめて」と、ご主人様が一番喜ばれました。

そしてそれから金色堂へ、貫首がずっとご案内をしたわけです。境内をゆつくり進まれて、決して急ぎません。光堂と対峙して、しばらく堂の前を動かない。讃衡蔵でも、経も金棺も立ちどまって御覧なっていましたから、とうとう、予定の新幹線には間に合わないとなつて急遽キャンセルされた。ご本人も随行も、いよいよゆつくりできるわけですよ。

能舞台にも、ということになって、そこで私がお話したわけですよ。

ドイツの建築家ブルーノ・タウトがここに佇つたのは1934年(昭和9)、この洗練された構造、この野趣ある建築物を、「これもまた独創的な日本だ」と日記『日本』に書いてます。

中尊寺の僧侶は、代々恒例の行事としてこの舞台で能を演じてきたし、今も、勤めていること。

そして、毎年夏、八月十四日には、この古格のある

月見坂をのぼって中尊寺で掌を合わせた思い出など、一人一人のなかにある心の風景を、読ませてもらえる。ここに暮らしている私たち皆が、「平泉」をあらためて考える縁ともなるのではないだろうか。

取められた作品それぞれにも、冊子の構成にも味がある。あるいは、こういうことを町民がボランティアで成し遂げたということ、その辺に、世界遺産効果とでもいわれる風が、ようやく吹いてきたのかもしれない。

(中尊寺仏教文化研究所長)



茶道裏千家鵬雲斎玄室大宗匠様による献茶式によせて

清水 広元

鵬雲斎玄室大宗匠様には、昨年四月二八日新造開眼された本堂ご本尊釈迦如来の宝前に東日本大震災物故者慰霊の点茶を奉献頂きました。献茶式に先立ち金色堂を参拝、本坊にご移動頂き濃茶席薄茶席とお廻り頂きました。大宗匠様にはその立ち居振る舞いのなめらかなこと、息をのむばかりでした。お供をされた茶道裏千家淡交会岩手県南支部長宮澤宗啓先生は道々お話をされた中、西行の「聞きもせず たばしね山の 桜ばな 吉野の外に かかるべしとは」の句を紹介され、大変興味深く聞き入っておられる様子でした。

大宗匠様の周りは常に和やかな雰囲気であられ、それについて献茶式全体を見ておられる凛とした力強さも感じられました。

お茶席のことなどなんの知識もなく、ただただ周りの方

の様子をみて濃茶を頂く際、隣の方より「次席の方に、お先しますと言って頂くのですよ。」お教え頂き、何とか過ぎた次第です。

震災後四年目を迎えるようですが、今回の大宗匠様の点茶奉献の盛儀により、みちのく東北の人々の安らぎの糧となることを念願いたします。

(中尊寺執事長)



慈覚大師報恩法要について

中尊寺法務部

平成二十五年十月六日(日)午前十一時より午後三時まで慈覚大師報恩法要として「常行三昧」と「お念仏会」を同時に行う法要が営まれました。

この法要は、この春(平成二十五年)悲願でありました本堂御本尊丈六「釈迦如来坐像」をお檀家の皆様を始め有縁の皆々様の御力により安置させて頂きました。秋に山上の開山堂に安置されておりました、「開山慈覚大師像」(天台宗僧侶・東京芸術大学名誉教授故西村公朝師刻)を本堂に御遷坐し、九月二十三日より十月十四日までの期間、本堂上段の間にて御参拝頂きたく開扉しました。(パネル展併催)

そして、十月六日(日)に「慈覚大師」様が中国より日本に伝えた法要の「例時作法(常行三昧)」と「お念仏」を同時に行う「慈覚大師報恩法要」を執り行わせていただきました。

この法会は、僧侶が「本尊 丈六釈迦如来坐像」の周りを「阿弥陀経」をお唱えしながら廻り、このお山を開かれた慈覚大師の業績と人柄・教えを讃仰しています。

そして、同時に行われた「お念仏会」はどなたでもご参加いただき「なむあみだぶつ」と一声お唱えしながら念珠を繰り、僧侶と一緒に中尊寺を開かれた慈覚大師様を讃仰すると共に東日本大震災被災物故者のご冥福と自身のご先祖様への回向をも祈念できる法会とさせて頂きました。

「お念仏会」と「常行三昧」を同時に行う事は、慈覚大師が中国五台山(山西省)で学んで日本に伝えた「五念仏」を基に皆様が自由に参加できるように再構成した法会です。

初めての試みでもあったこの法会は、僧侶、そしてご参加いただいた檀家の方々、その時におでましたいただいた方々、皆様から種々のご指導・ご感想を頂戴いたしました。一番印象に残るものとしては、僧侶が四時間お経を唱え続ける事と、僧侶のすぐ近くで自分たちが一緒にお唱えでき、自由に参加できることが一般の参加者にとって「自分たちの法要を行っている・自分の思いを込めることが実

感できた」とのお話を頂戴したことでした。
最終的にこの法要には六百人を超える方々にご参加いただきました。

ご参加いただいたお一人お一人、大念珠を繰りながら一心にお念仏をお唱え頂きましたことは、この法会を企画した私どもとしても大変ありがたく、得難き勝縁を結んでいただいたと喜んでいるところであります。

皆様には、この御縁を契機として、また当山にご参拝いただき仏縁を結んでいただければ幸いと存じます。

なお、会中一声でもお念仏にご参加の皆様には「本尊丈六釈迦如来坐像」護符ごふをお頒けさせていただきました。



平成二十五年西行祭短歌大会記念講演 (概要)

「人生の歌・歌の人生」

講師 小高 賢先生

ご紹介いただいたように、僕は歌を始めたのはごく遅いんですね。三十代半ばで始めましたが、それは偶然なんです。当時、私は馬場あき子先生と「著者と編集者」の付き合いでした。その先生が「かりん」という結社を始めることになったのですが、三十人ぐらいいか集まらなかつたんですね。それで、「貴方もやらないか」ということになったんです。私、馬場さんに仲人してもらったんですよ。その御仲人さんに言われたものだから：

(笑)

でも、それが不思議なもので、あれから三十五、六年になるのですが、今はもう、歌をはじめてよかつたと思うようになりました。当然の

ことながら、スタートが遅かつたので同世代の人たちはもう歌集をもっていたり、新鋭としてスタートしていたわけですね。例えば、ここへ来たことのある大島史洋氏とか。それから、小池光さんとか、永田和宏氏とか、私より先に歌をはじめ、新鋭歌人として第一線を張っていたわけです。こっちは何も知らないですから、一生懸命に指折り勘定して、五だ七だとかやっているわけです。ですからその時間差を埋めるために受験勉強みたいな勉強をしだしたわけです。つまり、近代短歌から現代短歌まで、ともかく数を読む、あるいは出版されている歌の文庫本を全部買って来て読むとか、あるいは一日に十首つくろうとか。一カ月三百首ぐらいつくってしまおうとか。そういうトレーニングをしていました。トレーニングといっても結果的に悔しいからやっているだけで…。例えば彼らと話をしていると、「空穂がこうなんだよね」とか「牧水のこういう歌があるよね」と言っているけど、僕はよく知らないわけですよ。



「一期一会」とよく言いますが、偶然というのは皆さんの人生の中にあるわけで、この偶然というのは歌にとって大事な要素です。その偶然を生かさなければいけない。歌には、締め切りというものがあるわけです。それまでにどうしてもつくらなければならぬ。そんな時、偶然が歌をつくらせてくれるんです。例えば、誰か亡くな

るとすぐに挽歌ができちゃうわけです。そういうことってありますよね。偶然を歌にすることなどは、その偶然をすごく大事にするということなんです。今日のように、雪が降ったというのも偶然で、今日の講演を止めて、「皆さんで歌を三首ずつこの雪でつくりましょう」とすると、これも一つの偶然になるんですね。

ですから、生きているかどうか分からないけれども、十年後にこれはものすごくいきることになるんじゃないか、という物事がいくらでもある。そしてそれを大事にする。歌というのは、そういうチャンスを生かす器としては、大変豊かで、おもしろいものなのです。

歌がうまくなるには人の歌をたくさん読まなければいけない。じつと黙っていて、天から良い言葉が降ってくるなどということは絶対ありません。いろいろな人の歌を読み、近代から現代の歌を読み、そういうものを真似し、模倣し、盗む。盗むというのは、穏当な表現ではないのですが、その盗むというのは言葉を盗むのではなくて、心

を盗むんです。「あ、こういうことに感動している」という心を盗むんです。

模倣とか、前の歌を取る本歌取りというのは、ある意味では日本の文学の伝統なんです。言ってしまうと、日本の一三〇〇年はずっと本歌取りです。例えば、西行法師の歌だって、先例はいくらでもあるわけです。ここのこういう感じというのは前の俊成のこういう言葉だ、とか。あるいは、もっと前の「古今集」のこういう言葉だ、とか。つまり伝統を前提として歌をつくっているというのはいくらでもあるわけです。

日本の歌というのは三十一音ですから、非常に文字数としては限られているわけです。ところが、その言葉の裏側に、綿々たる歴史が貼りついていくわけです。そのはりついたものを一緒に鑑賞することが歌の鑑賞なんです。ですから、歌というのは、つくる人と読む人がイコールでなければいけないんです。

小説というのは、つくる人と読む人は違えますよね。村上春樹の小説は皆は書けないです。どこ

ろが、読者がいるわけです。つまり近代の文学というのは、読者と作者が分離しているわけです。

日本の古来の文学というのは、作者と読者が一致しているんです。つまり詠まない人は鑑賞ができないうんです。ですから、よく短歌の鑑賞を作家の方などがやりますが、全くトンチンカンです。歌の伝統がわかっている。歌というのは、例えば我々がつくっているのも、与謝野晶子の傾向を引いているかもしれない。あるいは、芭蕉を前提にしているかもしれない。そういう文学なわけです。

それからもう一つ大事なことは、他人の歌を読むと同時に、それをお互いに語り合うこと。これがないと、歌というのは無理です。一人だけでつくって、一人だけで読んでいてもおもしろくありません。一人でつくって、一人で読んで、「ああ、自分の歌はうまいなあ」、これは歌になりません。歌というのは、一種の集団性があるんです。「一人でやるものだ」といいますが、実は歌というのは読者が必要です。なぜなら、三十一音というの

は、非常に限定された短い詩形だからです。ですから、他人に読んでもらう。様々な人に鑑賞してもらおう。これがすごく大事ですから、とにかく友人をつくることです。歌の友達をつくるのが大切なのです。

僕が短歌を始めてよかったのは、たくさん歌の友人ができたこと。歌じゃないんですね、歌を通して友人ができたんですね。それは、自分の経験の中で初めてです。同世代の友達は誰にでもいます。でも、下は高校生から、上は九十とか百歳の人まで、つまり歌を通して知り合えるわけです。僕も当時は若かったですから、九十ぐらいのおばあちゃんに手なんか握られちゃって、そういうことってなかなかないわけです。それはすごく良い経験なわけですね。歌というのはそういう要素がありますので、いつも同じ人たちと連ま^まないで、いろいろな世代の人と、いろいろな話をするということが、とっても大事なことです。

こちら平泉は西行に縁がありますので、西行の歌にちよつと触れます。資料に代表の歌がありますが、「小夜の中山（さやのなかやま）」、これは二度目に奥州に来たときの歌ですね。こういう歌は、若いころはどうとも思わなかったんですよ。「しみじみするなあ」と皆は言うけれど、別に、

年たけて また越ゆべしと思ひきや 命なり
けり 小夜の中山

と思わなかったのですが、読む方の年齢が高くなってくると、気持ちが悪く動くんですね。ああ、二度目で、たぶんこれで二度と奥州に行く機会はないだろうなあ、というしみじみした気持ちがかかるようになる。ですから、歌というのは、初めて下向したときに読んだ歌の読みと、二度目、三度目、年齢が変わったときの読みと違うんですね。変化するんです。歌の鑑賞というのは、読む人によって、あるいは年代によって、世代によって違ってくる。同じ自分にとつての名歌でも、三十代のときの名歌と、六十代のときの名歌と違うんですよ。歌というのは、そういうものなんです。常に作り

手と読み手の関係性で読まれるわけです。だから、絶対的な名歌というものはないんです。

斎藤史という人は、九十二歳で癌を患って亡くなったのですが、それまですごく元気で、怒ったり、それも迫力がある。

人に向きほほゑむは礼儀の一つにて老女
二十四時樂しきならず
次の歌は有名な歌ですね。

携帯電話持たず終はらむ死んでからまで便利
に呼び出されてたまるか
身の内の悪細胞にもの申すいつまで御一緒するのでしょうか

こういうのはとても辛い話ですが、癌すら歌の素材にしちゃう。そうすると癌と一緒に生きようという気持ちになる。これは病気に負けているんじゃないんですね。癌というのは、今は一番の死の病といわれて皆辛いわけですが、癌すら歌をよむ機会にしているわけです。我々はどこかで会ったり、今日もここで集まったり、あるいはどこか

でご飯を食べたりというのは、全部偶然なんです。その偶然的きっかけを歌にしてしまおうという気持ちでいると、すべての物事がおもしろいわけですよ。ですから、歌をつくるときに、自分の細部にもうちよつと目を向けないといけないと思います。大掴み^{つかみ}で歌をつくってはだめだということです。細かいところをどうやって認識するか。そこがすごく大事なわけです。

ところが、皆さんの歌は往々にして、「秋が来たから寂しいよ」みたいな歌が多すぎるんです。もう少し自分の固有性を細かく出してはどうでしょう。一人々々みな違うわけですよ。年を取って、皆「老い」と言いますけれども、老いだっていろいろな老いがあるわけです。Aさんの老いとBさんの老いは違う。だったらAさんとBさんの違いを自分で歌わなければいけない。ところが皆「老い」と言ったり、「老いの寂しさ」といったような一般論で話を済ませてしまうところがあります。さっき言ったように、もう一人の自分で自分を見るということ。そして、自分の細部をもう

少し自分で見つめること、それがとても大事です。しかし、その細部は読む人にわからないんじゃないか、という不安が皆にあるわけです。読んでいる人はこんなことを言ったってわからないんじゃないか。だからわかりやすい言葉。「寂しい」だとか、桜なら「散った」だとか「咲いた」だとか、皆がわかることをやる。この皆にわかってもらいたい症候群が皆さんにあるんです。そこをわかってほしい。

皆さんが歌会などをやって、一番厳しい批評は「わかりません」と言われることでしよう。それが皆さん不安でしようがないんですね。「わかりません」をわかってもらうために、皆がわかりやすい言葉を使う。「悲しい」とか、「寂しい」という言葉を使えば大体わかる。だからいけないんです。

「わからない」と言われるのはむしろ名譽だと思わなければいけないですよ。相手が「わからない」と言うのを怖がっているのはだめです。なぜな

ら、我々は歌を詠んでいるときに、有名な歌を僕らはなぜ知っているかという、いろいろな人が考えてその歌を膨らませているからなのですよ。

例えば、斉藤茂吉の『白き山』(一九四九)に有名な最上川の、逆白波の歌がありますね。あれは、逆白波をそのまま歌っているわけではないんです。そのとき茂吉はどうだったかとか、そのとき最上川はどうだったかとか、冬はどうで、茂吉はどういう状況であの歌をつくったか、皆、それぞれ知識として知っているから読めるわけです。「最上川逆白波」の歌は、最初は名歌でなかったんです。あの歌を誰も注目しなかった。ところがある人が「この歌は良いんじゃないか？」と言いだした。次の人が「こういう要素があるからすごく良いんじゃないか」と、どんどん、その歌がいつの間にか斉藤茂吉の代表歌になるわけです。

歌って、そういうものなんです。歌というのは、読み手がその歌を名歌にしていくんです。読み手がその歌を再発見して、再創造している。ところが皆さんは最初から名歌をつくらうと思ってい

る。名歌というのはわかりやすい歌が名歌ではないです。最初は「逆白波」と言う言葉なんて誰も知らないわけです。けれど、いつの間にか逆白波というのは歌人の間では常識になったわけですから、これが名歌が辿るプロセスです。

『老いて歌おう』という短歌集が出ています。これは介護施設とか、デイサービスとか、そういう施設に入った人や、その職員の人が歌っているのですが、すごいですよ。

例えば、「百二歳の先輩新たに入所して 養老院に活気の満てり」この作者は九十八歳ですよ。

また、僕が新聞で選んだ歌には、九十二歳の方が、村には百歳以上が七人いるから青二才だ、という歌があります。すごいですよ。僕の友人なんか、暮になると喪中の欠礼がくるのですが、大体百二歳とか、百四歳とか、それが当たり前になっちゃった。だから皆さん、残念ながらあと二十年ぐらい、三十年ぐらい生きちゃいますよ。するとどうするんですか、その時間。

僕も、自分が百歳まで生きちゃったら、あと三十年ぐらいあるわけですよ。百まではたぶんだめだと思うのですが、二十年ぐらいは下手すると生きちゃう。すると、生きるときに、仕事がなくになると男って辛いんですよ。毎日することがなくなる人が多いんですよ。だから、歌というのは仕事みたいなものです。毎日、自分の変化をつくらうことができるんです。

歌というのは、江戸時代以前というのは上層階級のものでした。もちろん防人の歌って『万葉集』にありますけれども、ほとんどの人は知らない。ところが、これが百人一首なども含めて人々に広まり、ずっと続き、結社という制度ができて、いろいろな人が参加できる。こんなに世の中の人が表現できる国ってというのは、世界でもないんです。我々は『万葉集』の歌が読めるわけですから。

だから、僕は外国の人が来ると、よく言うんですよ。「僕らは八世紀の文学を読めるが、貴方のところは八世紀ごろどういう国だった？」という

と、アメリカはまだ国がないわけですね。フランスもずっと後になってできるんですよ。ほとんどのフランス人は、古いフランス語は読めないんです。イギリス人もそうです。我々は古文で『源氏物語』を読めるんです。急にナシヨナリズムになって「日本は良いんだ」という話になるとまずいのですが、我々は、そういう意味ではすごく有利な場所にいるということを認識した方がいい。ですから、毎日苦しいとか、歌うことがないとか言っていないで、毎日の日常生活、朝、おみおつけを食べたとき、ご主人の豆腐の具のほうが多くて、自分のが少なかったのだから歌になるんですよ。昨日はよく寝られなかった、というのも歌になるわけです。

皆さん、自分の人生を表現しなければいけません。表現することが自分の人生を全うすることなんです。これだけ自分たちが表現できる手段を持っているのに、「悲しい」とか、「柿の木が赤くなった」とか、「桜が咲いた」というだけではな

くて。もちろんそれも大事です。季節の移り変わりは大事ですが、それだけではだめで、自分の周り、友達、家族、周囲の人、あるいはもつと言えば、作品を通して他人の人生を眺めてみる。これがすごく大事です。表現による自分の客観化、位置付け。それから、見えてくるものの細かいところを見る。西行も我々も変わらないんです。有限な時間しかないんです。百歳ぐらいしか生きないんですから。僕も皆さんも必ず死ぬわけです。死を迎えて大切なことは「自分の人生を全うできた」という気持ちを得られるかどうかです。そういうことかというと、歌で自分の人生を表現することが大事なのではないか。生きる力は短歌によって必ず獲得できると思います。

最後に辛口になりますが、一般化しないことです。自分は他人と違う。一人々々感じ方が違う。共感を得るためには、言葉の力によって共感を得なければいけない。「寂しい」という言葉の概念で共感を得てはだめだ、ということですよ。皆さん

は「寂しい」とか「悲しい」という概念で共感を得ようとする。それは「寂しい」という言葉を受け取っているだけで、決してその人を理解していることになりません。だから、非常にわかりやすく言うと、「寂しい」と「悲しい」だけで歌をつくらないこと。もつと言葉を発見しなければいけない。言葉は、毎日言葉が出てきています。テレビでも、新聞でも、子供の言葉でも、その言葉をメモしておくこと。もう年齢で、みんな忘れてしまっているんですよ。僕なんかすぐに忘れてしまう。だから、手帳でも何でもいいから、メモをすること。そうすると忘れません。そして、ユーモアをもって歌を詠んでいただきたいと思います。みなさんはせっかくな歌という手段をもったのですから、絶対に歌を続けていただいで、自分の人生を表現してください。

(外は、ほら、また雪が……) 雪が落ちてくるのを何と言うんですかね。たぶん言葉があるんだと思います。いろいろな人に聞けば、言葉がたぶんあるんだと思います。そういう言葉を発見する。

是非がんばってください。

・ 本誌編集子ができるだけ講師の語り口を容れて要約し、成文させていただきました。

プロフィール

こだか けん

一九四四年（昭和十九年）七月十三日生まれ。

慶應義塾大学経済学部卒業。

「かりん」選歌委員

現代短歌大辞典編集委員

現代歌人協会理事

「よみうり文芸」・「日本農業新聞」歌壇選者

本稿の校正をお願いしていた段階で、小高賢先生の突然の訃報に接しました。「まさか」のことでした。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

祖師先徳鑽仰大法会 慈覚大師一一五〇年 御遠忌比叡山参詣旅行

中尊寺檀徒総代 千葉 和 夫

一、国宝「信貴山縁起」

私たちのバスは大阪市内を南下し、奈良県信貴山・朝護孫子寺に向かう。今回の中尊寺総代・世話人研修旅行は、中尊寺開山の祖・慈覚大師円仁の一一五〇年御遠忌に当たることから比叡山参詣を中心に日程が組まれた。七月五日から二泊三日、清水広元執事長を中心に檀家有志を含む総勢三十名の参加者である。高速道を降りると間もなく目的地だ。

参道を登りはじめ、樹齢数百年の古木を左右に眺めながら進むと、突然巨大な虎の置物が現われた。ガイドの説明では数百箇所にも虎のデザインが

あるとのことだ。およそ一四〇〇年前、聖徳太子が仏教に反対する大豪族物部氏を排斥しようとして、ここにもつて四天王を刻み奉納したところ、寅の年・寅の日・寅の刻に四天王が現われて「信ずべし、貴ぶべし」というお告げがあった。これに導かれて討伐に立ち上がった、といういわれがあるとのことだ。

寺内では丁度秘仏の公開がなされていた。四天王の一つ毘沙門天である。一段と高い本堂での参拝だが暗くてよく見えないうえに、次々に参拝客が来るのでゆっくりもできない。秘仏の特徴をつかめないままに引き返さざるを得なかった。秘仏はやっぱり秘仏である。

わずかな自由時間に宝物殿に入ると、そこに信貴山縁起なる巻物があった。なかなか面白い。かつて見た京都高山寺の鳥獣戯画同様この信貴山縁起も日本四大絵巻の一つであり、実物は国宝である(国立博物館保存)。複製であるとはいえ、今回の旅の収穫であった。

夜は比叡山延暦寺会館に宿泊、精進料理がおい

しい。味にも歴史がある。

二、慈覚大師一一五〇年御遠忌法要

お山は静かである。根本中堂を中心にいくつかの堂宇が配置されているのだが、いずれも簡素で重厚、周囲の森とよく溶け合っている。朝の散策を楽しむ団体客の話し声も、豊かな大自然にすべて吸い込まれているようだ。比叡山の山麓から山頂に至る広大な山地は豊かな自然に恵まれている。このお山が千日回峰行という荒行を可能にし、一草一木に命を感じさせるのである。

七月六日午前、今回の旅行の主目的である「慈覚大師一一五〇年御遠忌陸奥教区法要」が行われた。参詣者は全体で十七ヶ寺三〇八名、平泉関係(中尊寺・毛越寺・満福寺)約一〇〇名の参加となった。陸奥教区宗務所所長の千葉亮賢師を導師とし、本山から天台宗務総長・阿純孝様、総本山延暦寺執行・武覚超様他数名をお迎えし、厳粛に法要が行われた。私は読経に耳を傾けながら、異国の地で苦闘する慈覚大師を思い浮かべた。





朝護孫子寺にて

り別格神社である。
 神宮の主・新御正宮はほぼ完成し、遷宮の儀式を待つばかりになっていたが、全体が覆いに覆われ、真新しい姿を見ることができなかった。しかし、その隣にある現在の御正宮から、高床式住居に近く、神殿独特の美しさをかいま見ることができた。
 式年遷宮は二十年ごとに行われる。第一回目は六九〇年、今回は六十二回目にあたる。遷宮とは建物を造り直すことだけではなかった。橋、鳥居、衣装から祭具にいたる全てのものが一新される。しかも一三〇〇年の昔と変わらぬ素材と技術が用いられている。遷宮は日本の伝統文化の底辺を支え、広く産業に与える影響が大きいことを知った。参拝を終え、帰途へ。有意義な楽しい旅であった。

(ちば かずお 中尊寺檀徒総代)

三度の遭難にも負けず、命がけで入唐した慈覚大師だったが、目的の天台山留学の許可が下りないまま帰国の時が近づいていた。このままでは帰れないと思った大師は、五台山に行くことを決意する。五台山までは約一三〇〇キロ、唐の朝廷の滞在許可はなく、言葉は通じず、周辺は多民族に於いて貧困、危険を顧みない旅だった。五台山に着いた時は体力の限界だったと言われる。ここで学んだ大師は、さらに西方一〇〇〇キロ離れた長安の都まで行って学ぶことになるが、その頃既に唐朝の廃仏政策が始まろうとしていた。帰国するまでの十年、まさに波乱に満ちた十年であっただろう。

大師が歩いた距離は往復約四八〇〇キロ、北海道から九州・日本列島を往復して、なお一〇〇〇キロ、このような過酷な旅を可能にしたのは何だったのか。それは慈覚大師の信仰の深さ、不撓不屈の精神力、数多くの信者の支援によることは言うまでもないが、根本的には人を引き付けて止まない「人間力」ともいべき大師の優れた特性

にあったのではないか。大師は偉大である、と考えた時、法要は終わりに近かった。

午後は伊勢方面に移動し、鳥羽水族館の見学だ。

三、「式年遷宮」

伊勢神宮は内宮と外宮に分かれているが、私たちは内宮のみの拝観予定だ。

七月七日、早い時間に神宮に着くと、未だ参拝客は少ない。参道の入り口には、きれいな川・五十鈴川を挟んで二つの鳥居があり、橋(宇治橋)が架かっていた。橋は総ヒノキ造り、欄干と橋脚の木組みが見事だ。この橋をはさむ二つの鳥居の直線上に本殿にあたる御正宮があり、冬至には更にその東方に日の出が見られるとのことだ。神宮は天照大御神がご神体である。

境内は整然とし、まっすぐ伸びた大きな杉の木が美しい。神の存する豊かな自然に何か圧倒的な力を感じる。飲み物を探したが売り場がない。お札売りもない。あるのは大小の社のみだ。何箇所かで礼拝したが、賽銭箱さえない。神宮はやっぱ

「心・技・体」を育てる

館 下 光 利

小学校に入学して間もない娘が「さんさ踊りを踊りたい」と言い出したことから、郷土芸能に携わること二十年余り、毎年その時々、地域の方々のご協力で今日まで続いて参りました。

地元の人口も減り、高齢化も進み、加えて新しく住居を構えた人々とは、なかなか馴染みにくく、いつの間にか全世帯参加の行事にも、なかなか人が集まらなくなりました。「集」から「個」に代わり、昔ながらの郷土芸能は、そこには必要の無いものになりつつあるのでしょうか。核家族世帯になり、昔話を祖父の膝の上で聞くこともなくなっている現状とは反対に、強い絆を守ろうとされている他の地域のことを聞くと、羨ましくも思えてしまいます。

かつて郷土芸能は、地域文化の象徴であり、世代間コミュニケーションツールでもあったと思います。そこには先人の思いと歴史が詰っています。前津軽石さんさ踊り保存会会長の館下昇平氏は、昭和三十年代からご指導にあたっておられました。津軽石保育所・小中学校にも伝承の為に赴き、学芸会、運動会、学習発表会、文化祭での披露にもお力添えいただきました。そこには氏のご家族のご理解があったことはいまでも無く、また、地域の方々と共に衣装の修繕もお手伝いいただき、深く感謝致しております。

会長が平成十二年に現役を引退された折には、我々会員の中にいろいろな不安がよぎりました。第一に、我々と会長の間には三十余年の隔たりがあり、その経験差を埋めてくれる先輩の姿は少なく、会長に恃むところが大きかった私は改めて課題の多さを目のあたりにいたしました。十二年たった今でも暗中模索を続けております。

会員不足のなか、継承のために必要な子供たち

の勧誘、地域のみなさまへの呼びかけ、そして衣装や道具の保守、更新費用などの課題が山積しておりました。技術的な指導は何とか先輩方にお願ひし、模範演技を収録することで、継承の為に必要な記録は揃えることができましたが、練習の成果を発表する場を多くすることで、会員に自信と目標・目的を持たせる事が必要と思ひ、当時、少ない人数ではありましたが、「みやこ秋まつり」「宮古夏祭」などに積極的に参加し、更にさんさ踊りの大舞台「盛岡さんさ踊り」にも三度出場しました。すると会員は驚くほど増え、目的を持って活動するという方針は間違っていないかったと実感しました。

その間「みやこ秋まつり」に向けて、舟山車「虎一丸」を建造。「盛岡さんさ踊り」参加の為、衣装・道具の新調など、無我夢中に進めて参りました。その一方、私も会員も、自分達が演じている芸能の歴史や由来などをほとんど知らないということに気づきました。正確な伝承のためにも、なんとかそれを勉強したいと思ひました。

しかし、その歴史・由来を教えてもらうことがなによりも難しいこととなりました。今まで津軽石さんさ踊りの活動は津軽石稲荷神社の祭典、及び津軽石地区の行事での披露程度であり、それを知る必要が無かったからです。知っている人などほとんどいませんでした。調べるしかない、どこで？ 図書館、PC、発祥の地三ツ石神社へ……「五十集衆」^{いさば}「幸呼来」^{きょうこら}など初めての言葉ばかりでした。何とか意味をつなぎ合わせ、折にふれ話題にすることで、会員にも徐々に浸透しつつあります。

この間に市町村合併が進み、宮古市は田老町、新里村、川井村と合併しました。すると町村単位の連絡会の必要性が議論され、宮古市郷土芸能団体連絡協議会の発足に到りました。

しかし、総面積一二六〇km²の広域の弊害として、会合の行き来にかかる労力に加え、高齢化に伴う役員・事務局の選考は難航し、発足までに長期間を費やすこととなりました。結果的に私が事務局

を引き受けること、また会長は旧市町村単位での持ち回りということで、発足にこぎつけることができました。現在は新里地区の、大森茂会長に継続していただいております。

当初の登録団体数は二十二団体でしたが、後に三十団体（三十八種目）まで増加しました。しかし、休会状態に陥る団体もあらわれてくるなど、継承者不足は各団体の深刻な問題になりつつありました。

そんな折、あの東日本大震災が起き、私は消防団員としてまさに現実とは思えない事態に直面しました。あの悲惨な状況はご承知の通りで、思い出すたびに夢であってほしいと思わずにはいられないのです。宮古市津軽石地区は、宮古湾奥にある集落で、津波が増幅し津軽石川水門を軽々と超え、住宅地に押し寄せて、赤前・法の脇地区を破壊し尽くしました。

津軽石地区では郷土芸能団体が五団体活動していましたが、その中の「法の脇獅子踊り保存会」は、

町内会の建物ごと、衣装、道具、獅子頭など、全てが流失してしまいました。

しかしそんな時、昭和三十三年のチリ地震津波の記憶が過ぎりました。あの時もみんなで助け合い、地区会、青年団、消防団、そして、郷土芸能の力により今の津軽石が築かれてきたはずだと。

今回は、更に自衛隊、内陸部の建設業者、ボランティアの方々迅速なご助力をいただき、頭が下がりました。これほど日本人で良かったと思っただことは無く、今も感謝の気持ちで一杯です。

また津軽石小学校の児童会が、その感謝の気持ちを行動に移してくれました。自衛隊が校庭に仮設浴場を設営していた関係から、交流もあつたらしく、撤収の折、皆さん踊りを全校で披露し、隊員と、被災者、近隣住民、我々保存会会員が一緒になつて踊りの輪を作り、ひと時を過ごすことが出来ました。子供たちも子供ながらに、自分たちが出来ること、感謝の気持ち伝えようと模索していた。これは、先生方の指導の賜物であるとともに、そこに皆さん踊りの伝承・指導を通して、関

わる事が出来たことを誇りに思いました。さらに、津軽石中学校生徒も、法の脇獅子踊りの獅子頭を手作りし、翌年の文化祭に演舞しました。

数カ月後のお盆過ぎから、被災者の方々が仮設住宅に移られたので、津軽石小学校体育館において、少しずつ練習を再開しました。

そんな折、中尊寺様からの三陸郷土芸能奉演の招待の連絡をいただきました。ご招待は、嬉しかったです。これまでの活動に対するご褒美と思い、目頭が熱くなりました。会員と話し合い、奉演に向けて準備を開始しましたが、幸いにも参加人数も確保でき、それをきっかけに、練習も本格的に再開することとなりました。

奉演当日は天候にも恵まれ、我々も子供たちも、しばしの時間現実を忘れることが出来ました。

さて本番、お寺での演舞自体が初めての会員たちでしたが、練習してきた自信のあらわれなのだろう、その演舞たるや堂々としたものでした。演舞場所の予定変更などにも、慌てず動いてくれま



中尊寺参道にて 平成22年

平成25年三陸郷土芸能奉演

9月14日からの3連休、大型台風が東北をおそったその週末、三陸郷土芸能のご奉演が開催されました。おりからの暴風雨の影響で、本堂でのご披露となってしまった団体様もありましたが、多くのお客様のいらっしゃる中、無事にご奉演いただきました。



9月14日 江繋鹿踊り (宮古市)



9月15日 津軽石さんさ踊り (宮古市)



9月15日 槻沢剣舞 (陸前高田市)



9月15日 門中組虎舞 (大船渡市)



9月16日 城山虎舞 (大槌町)



9月16日 赤澤鎧剣舞 (大船渡市)

した。子供たちは、思っていた以上にたくましく成長していたのだと感じました。

帰りの車中では、いつもは辛口の批評の大森繁喜副会長も、概ね満足の言葉、そして会員の感想の多くは、中尊寺様の心遣い—今はやりの言葉で表すと「おもてなし」の心に感謝の想いでいっぱいでした。

平泉町までの移動時間は片道約三時間に及び、その時間を有効に使うため、みんなでさんさ踊りの由来と、津軽石地区の歴史を復習をしました。

良い意味で過去の事実を話すことで、過去を知り、知ること未来、希望が見えたら、それでいいのではと思います。

今回の奉演にあたり、中尊寺様を始めとする全国の皆様からの、東日本大震災に対するご支援に、会員も感謝の思いをどう伝えたらいいかと話しておりましたが、中尊寺様とのお話を進めている中で、私の中に「心・技・体」という言葉が過ぎりました。演舞を指導する中で「心・技・体」を育

てること。私たちは地域の子供たちに、郷土芸能を伝えながら「先人の思い」を伝えることで、みなさまからのご支援に対する感謝と、お礼を表していくことをお約束したいと思えます。本当にありがとうございます。

プロフィール

たてした みつとし
宮古市指定無形民俗芸能 津軽石さんさ踊り保存会幹事長 宮古市を中心に郷土芸能の維持・発展のために活動している。

「中尊の釈迦」

大正大学学長 多田孝文
中尊寺貫首 山田俊和

孝文 本堂の御本尊、開眼ですね。皆さんお喜びでしょう。

貫首 お陰さまで、中尊寺一山がこれまで長いこと待ち望んでいた丈六の釈迦如来です。現在の本堂は、明治四十二年の再建で、その当初から、丈六仏の御本尊を奉安するということを頭において、内陣の高さも考えていたようです。

本来、中尊寺の御本尊は、清衡公の『中尊寺落慶供養願文』（重文）の最初に「鎮護国家大伽藍一区のこと 安置し奉る丈六皆金色の釈迦三尊像」とありまして、それが、建武元年（一一三四）の大衆訴状などを見ますと、金堂はじめ諸堂退転し、「仏像の無い御堂で御祈祷致すの条、憚りあり」といったことになる。

中尊寺では、正月、古来の例に則_のつて元旦より八日まで、国家の平安、人びとの無事息災と自然の豊かな恵みを祈念して修正会を厳修し、「牛玉宝印」を秘法加持致しますが、その御札が「大釈迦堂牛玉宝印」なんです。

一山には、丈六仏三体、阿弥陀如来と二体の薬師如来が遺つて在った。明治以後は、その丈六の阿弥陀如来を本堂の御本尊として拜んできたわけです。

孝文 いま、讃衡蔵に安置されている、あの、平安の丈六仏ですね。

貫首 そうです。が、昭和三十年に讃衡蔵が竣工して、山内の国宝・重文に指定されているものは皆、あちらに保存収蔵されることになりましたから、本堂の方はそれに代わる御像を御本尊として法要を執り行ってきたわけです。

ところが、平成二十年に世界遺産登録が期待され、五十年ぶりに、以前のように丈六の阿弥陀像を本堂にお戻ししまして、半年ほど旧観に復したのです。その折、私は百万篇念仏修行をさせていたんですが、毎日その御本尊のお姿を拜んでいまして、思ったんです。「本堂には、やはり丈六の仏様をお迎えできたら——」と。そういう思い

を寺で話したところ、「実は私たちも」と、一山のみんな、思いが一つだった。それなら、清衡公の「願文」にあるとおり、本来の丈六釈迦如来を新たに——ということになったわけです。

手の形（印相_{いんさう}）も、中尊寺経の見返しの絵によく見られる、左手の甲を正面に向けたような、説法印がいい、ということになって。

孝文 現代、なかなか釈迦如来像が作られることが少ないけど、もともと釈迦だからね。で、平成の何々とか、呼称は、なにか考えているんですか？

貫首 昔もそうだったんじゃないですか。何々薬師とか、なに地藏とかはよくあります。地方では慈覚大師（円仁）や慈恵大師（良源）といった祖師信仰も盛んですが——。

（『枕草子』に、「仏は、如意輪、千手、すべて六観音は有難い」って。それから「薬師仏、釈迦仏、弥勒、地藏」といった順にあげてますね。釈迦如来は、薬師とか地藏とかのように個々の願いがあつて拜むのとは違うようで——）

孝文 日本の天台宗で本尊について問われた時は、拜むあなたの心のままに相應しい、いずれの仏菩薩でもよろしいですと答えます。

実は、少し難しくなりますが、その答の根本には、伝教大師（最澄）の教えがあります。伝教大師は「内証仏法相承血脉譜」（仏法が師から弟子へ脈々と受け継がれた系譜を記したもの）のはじめに本宗の本尊が示されました。それは「常寂光土 第一義諦（報身）久遠実成 靈山淨土（法身）多宝塔中 大牟尼尊（応身）」という長い名前のお釈迦さまです。

このお釈迦さまは、法身・報身・応身の三つのきわめられたおすがたを具足した仏で、これが天台の本尊とされています。

この釈迦本尊は、法華経の寿命品第十六の教えによつたもので、この世に存在するさまざまなる仏・菩薩等は、人の心が異なるように、それぞれに相應しい姿に化現したものです。その本体が伝教大師の示された、三身具足の釈迦如来であり、天台の本尊です。

伝教大師（最澄）はこのことを言いたくて、「久遠実成

多宝塔中の釈迦牟尼如来」が本尊、と説いているわけです。今回、中尊寺一山の宿願であり、多くの方の御縁をいただいて成った釈迦如来というものは、三身具足の釈迦なんです。

(法身とは、法界に遍満している不変の真理そのもの。お身とは、衆生の救済のために応じて現れた仏身。つまり歴史世界におけるブツダの人格をもった身体。報身は、衆生済度の願いと実践の報いとして功德力を備えた仏身の意)

実は、本尊論争が起きたときに、父が書いて本堂に貼つてあった紙があります。それには正に「常寂光土第一義諦靈山浄土久遠實成多宝塔中大牟尼尊」と書いてあって、それを本堂の真ん中に張つてありました。私の寺、大聖院は御本尊がお不動さんですけど、この紙が貼つてありました。中尊寺が、本尊として釈迦如来像を造立されたことを、父も喜んでいるでしょう。

(厚隆師が貫首としていらした当時、私たちもそうしたこ
華三味の解説書『法華三味行法』、これは心のありようについて書いてあるんだけど、そこに書いてある「面奉弥陀」の解説がおもしろい。自分が仏さんに面したいときに、何もないところでも仏様に法界に何かを発したいとき、自分に合う仏様でよい、とある。なぜそれでよいかというと、天台ではどの仏も三身具足だから。その大本は、当然釈迦ですよ。

貫首 中尊寺の寺伝によれば、慈覚大師がこの地に一字の堂を建てて釈迦像を安置された。後に、清衡公が山頂に一基の塔を建てた。これは如法塔でしょう。そして寺院の中央に、釈迦・多宝の「二仏並坐」の多宝塔を建てられたことが、『吾妻鏡』にも見えます。この奥羽の地に、仏の教えを根付かせようという、仏の国を造ろうというその思いを受け継ごうという気持ちです。
孝文 もちろんそうだと思います。中尊寺の「中尊」について、「人中の尊」だと父からきいてるでしょう。「人中の尊」お釈迦様をお祀りするということとは、東北の此処だけのためじゃないですよ。ここから、世界へ発信するということですよ。

といろいろ伺いました。「大日も阿弥陀も釈迦も一仏である。真実は一つなんだ」と、憶えています。

孝文 天台の歴史の中でも、大日如来をどう扱うかという話があつて、そのときにも『法華文句』にある「毘盧遮那仏、盧遮那仏、釈迦文仏」に、大日如来も同じ、ということとを言っている。それに安然さんが気がついて「大日も釈迦も一体」と、教判をたてたわけです。

去年、中尊寺で秘仏御開帳されましたね。私もお参りさせていただいたけど、つまり、一字金輪仏(大日如来)もお釈迦さんも一体なんですよ。

貫首 中尊寺は、金色堂が御本尊阿弥陀如来で、西方浄土を建築・工芸で具現した、そういう御堂ですから、この寺は阿弥陀信仰の御寺と、そのように思われるようですが、阿弥陀様はお釈迦様の慈悲の本体を顕した、そういうことですね。

孝文 天台では、法華三味の四悔に「面奉弥陀」とあるけれども、古い資料が金沢文庫に残っていて、そこには「面奉弥陀」とあります。天台大師は弥陀信仰でしたから。法

平泉の「世界文化遺産」登録、よかったですね。そして昨年は、秘仏一字金輪仏の御開帳、そして今度の、本尊・丈六の釈迦如来造立と、素晴らしいことです。

貫首 これは、藤原氏から受け継いできた法燈、文化を、現代の私たちも同じ気持ちで受け継いでいくことであつて、一山の僧侶だけでなく、地域の皆さんと一緒に文化を守っていく、誇りをもって護持するという気持ちが大切なんだろうと思つています。

孝文 仏像は、拜む者の気持ちです。清衡公が「願文」で言うように、人間だけのことを考えていては駄目ですね。中尊寺へお参りして気持ちがよいのは、その自然も含めてのことです。人間は当然、自然も応援してくれている。そのことを見なくなつてしまっている。自然は何一つ文句も言わずに、二酸化炭素を酸素にして――、そうして我々が生きられる環境を作ってくれている。人間は、その一部に過ぎませんから、自然の一部、そういう意識を忘れてはいけない。

中尊寺の中央に三身具足の釈尊を安置し、奥州藤原氏は三代にわたつて、平泉に諸堂を建立し諸仏諸菩薩を配して

一大曼陀羅の世界を具現したわけですから、その世界で生活をするということは、常に仏土を浄めるという心で精進されたでしょう。

貫首 その、目に見えない力を感じ取るのが修行だと思ふ。
孝文 我々は、わがままを言いながら生きているけれども、一乗というのは我々の計り知れないものです。仏の慈悲とか智慧による世界です。それがすべてに行き届いている世界です。仏様の世界にいてわがまま言ってる場合ではありません。一乗とは、まったく仏心の世界です。うまくいかない訳はありません。「仏所護念^{ぶつしよごねん}」ですよ。仏に護られるように生きればうまくいかないことはない。

では、うまくいかないのは何故か。「法華経」の譬喩品の話ですが、舍利弗はうまくいかないとひがんでいた。なぜ、お釈迦様は私に手をさしのべてくれないのかと。ところが、「法華経」方便品に、仏心は説かれているわけです。手はさしのべられていた。舍利弗はそれに気がついて、仏心を受け取らなかった自分がいけなかったのだと気がつくわけです。

人間社会というのは、うまくいかないはずはありません。

中尊寺職員研修旅行 報告

菅原光聴

今年度の中尊寺職員研修旅行は、二班編成で九州福岡・大分を二泊三日の旅程で巡る旅である。みちのくにゆかりの地あり、ご縁のお寺あり、グルメに温泉ありと満載の内容だ。年も暮れて寒さも日に日に増す東北から温暖な九州へ、心はずませて仙台空港行きチャーターバスに乗り込んだ。

第一日目

●仙台空港より福岡空港へ降り立ち、貸切バスにて神湊漁港へ。海上タクシーをチャーターし宗像大島へ上陸。
(第一班の海上はアドベンチャーなみの大波。第二班は一転、地元の方も珍しいと言うほど鏡のような風面。)

●安倍宗任の墓がある安昌院を参拝。安川至道ご住職より安倍宗任とその子孫のお話をはじめ、玄界灘に浮か

仏心に護られているんですから。でも、時々うまくいかなかったのは、なぜか。他人のせいではない、自分の責任なんです。そう思つて生活していれば、どんどん良くなります。

世界遺産登録の過程で、「浄土」つてよく言われたようですけど、浄土とは仏の土^どです。その仏の土で、わがまま言つて生きてると汚してしまう。仏の土を汚すなよ、仏の心のままに生きれば浄めることになる。我々は、仏の浄い世界を汚してはいけない。汚してしまったら、それに気が浄めることです。

貫首 自然と、人と、共に生かされ生きる。いま、東北が一つになって、一昨年の大震災で多くの方を亡くした被災地の方々に、中尊寺のこの金色の釈迦如来が一条の光と映るように、そう願つてやみません。

(――ありがとうございました)

※この対談は、中尊寺本堂新本尊開眼法要記念誌「一条の光」に掲載したものを、再掲載したものです。

ぶ沖ノ島、大島と中国大陸・朝鮮半島との古代からの海上交通を介した文化交流の歴史など大変興味の尽きない講話をいただく。その後宗任の墓参をし、波乱の生涯をおくつた陸奥の勇者に想いを馳せ、手を合わせる。衣川に本拠を置く安倍頼時の子として鳥海柵を守り、源頼義・義家軍に敗戦後は故地を離れ伊予(愛媛県)、そして筑紫の大島に流され、宗像氏の庇護を得てこの地に持仏の薬師如来と毘沙門天を安置したという。ご住職によると宗任は東国の安寧と安倍家の隆昌を願つて東寧山安昌院と号したという。私たち東北の人間にとって身近な歴史上の人物が、遠く九州でも現在まで語り継がれていることに感慨を深くする。

第二日目

●福岡中洲で名物水炊きに舌鼓を打ち精力を蓄え、二日目は市内のホテルより一路バスを大分自動車道に走らせて。宇佐八幡信仰と天台修験の薫風織りなす山岳仏教の聖地・国東半島の六郷満山霊場に向かうためである。

●蓮華山富貴寺を参拝。国宝・大堂の中で河野英信ご住

職よりご法話を頂く。富貴寺大堂は十二世紀、宇佐八幡大宮司家により創建されたとき、中尊寺金色堂とともに阿弥陀堂建築の代表である。堂内の柱や長押に残された彩色文様や仏画をライトで照らしながらご説明いただき、往時の荘嚴の華やかさを実感する。戦時中は地域の子供たちの遊び場となっていたお話、空襲で屋根瓦を飛ばされながらも戦後修理を経てお堂を守り伝えてきたこと、宝形造の屋根は金色堂と同様でありながら建物の平面は長方形という珍しい構造であることなど興味深いお話を伺うことが出来た。

●石造の仁王像に迎えられ、文殊仙寺の長い石段を登ると、山門で秋吉文隆ご住職にお出迎えいただく。第一班で訪問時は酒井雄哉大阿闍梨伝授の八千枚護摩供を副住職が厳修中であつた。文殊菩薩を安置する奥の院を参拝し、客殿で奥様手作りの甘味を頂戴した後、ご住職に鐘楼門と国内最大の宝篋印塔までご案内頂いた。峯入り修行の霊峰にふさわしく、境内には清冽な空気が立ちこめていた。

●両子寺は六郷満山の中山本寺として栄えたお寺で、広

第三日目

●いよいよ最終日、朝早めに宿を出発して由布院金鱗湖周辺を散策し、白杵に向かい石仏群を参拝。地元ガイドさんの案内で四群六十余体に及ぶ磨崖仏をお参りする。このような第一級の石彫仏を誰が何の目的で築いたか不明であるというのも神秘的な話である。また、小高い山の中腹に建つ嘉応二年（一一七〇）の在銘五輪塔は、中尊寺釈尊院五輪塔に継ぐ国内第二番目の古塔で、一つの石から切り出した堂々たるお姿だった。第一班ではこのあと、稲葉藩ゆかりの二王座歴史の道へ。ここの鄙びた酒屋さんで、焼酎「赤霧島」の掘り出し物に出会い、散策もそぞろ手に四合瓶、はたまた



い境内は折から美しい紅葉に包まれていた。まず護摩堂をお参りし、寺田豪淳副住職よりお寺の由緒についてご法話いただいた。午の日の申し子祈願など独特な信仰のお話も興味深かった。その後「鬼橋」という一枚の大石の橋を渡つて奥の院へ。やはりここでも長い石段が続く。上気した面持ちで千手観音と両子大権現をお参りした後、お堂裏の洞窟に湧き出る不老長寿の霊水で精気回復。その後客殿にて寺田豪明ご住職ご夫妻より茶菓を頂戴する。石段が続く参道に立つ国東半島最大の石造仁王像も素晴らしい風格だった。

●二日目は僧侶・職員一同、老いも若きも山岳修行よろしく峯入りの聖地をわずかながら歩かせていただいた。夜は「おんせん県」を謳う大分の中でも、まちづくりへの高い意識とリピート率で有名な由布院温泉へ。うつすら雪化粧の由布岳を眺めながらお湯につかり、両子寺様よりいただいた銘酒「西の関」を頂きつつ、第一班団長と九州のご住職様方との旧交の思い出話に花が咲く。

一升瓶を下げてバスへもどる。

●白杵を後に、強行軍のバスは太宰府へとつ返す。旅程の都合上、第一班では飛び梅さながら超特急で九州国立博物館と太宰府天満宮を見学。それでもしつかり「梅が枝餅」を堪能。第二班では第一班の教訓を生かし、旅程をシンプルにし自由時間を設けてゆつくり参拝。博物館の近未来的な雰囲気とアジア圏からの旅行者の多さを肌で感じながら思い思いの神だのみを柏手に込める。

●福岡空港で、なおお土産を買い込み飛行機へ。中身の濃い充実した研修旅行だったと実感しながら一升瓶とともに仙台に降り立った。

訪問先のご寺院様はじめ、旅行中お世話になった皆様、本当にありがとうございました。

第一班（十一月十九日―二十一日）

団長 佐々木邦世以下十七名参加

第二班（十二月三日―五日）

団長 佐々木秀厚以下十八名参加

（総務部次長）

福岡宗像大島と

大分国東半島三日間の旅

及川 由紀子

今年の職員研修旅行の行き先は昨年コース変更により行けなかった九州の旅でした。九州にはこれまで行った事がありませんでしたので、私たち参加する職員一同とても楽しみに待ち望んでいました。

一日目の始めは宗像大島へ。この島にある安昌院には前九年の合戦で流された安倍宗任のお墓があり、またそこは島を一望できる高台にあり、とても眺めが良かったです。

今回の旅行の目的にはここのお墓参りがありました。

また、ここには安倍宗任が拝んでいたと言われる念持仏の高麗仏が安置されており、それを今回は直近で拝見させて頂く事が出来ました。さらには住職が、遠路はるばる来山して頂いたという事で（職員旅行の参加人数は安昌院の何年か分の拝観人数になるようです）、副住職も初めてという秘仏を特別に拝ませて頂きました。まだ旅が始まった

ばかりでしたが、宗像大島はとても記憶に残る場所になりました。



さて宗像大社では「西日本菊花大会」が開催されており、アンパンマンの菊人形を始め、内閣総理大臣賞の見事な懸崖など境内の彩りを鮮やかにしていました。やはり大きな大会はスケールが違うと感じさせられました。

夜は博多名物の水炊き&モツ煮を堪能し、明日の石段登りに備え力を蓄えました。

二日目は国東半島めぐりでした。富貴寺は銀杏並木に囲まれた静かな場所に建っており、地面に落ちた銀杏の黄色

とお堂が一枚の絵になるようでした。平安建築の宝形造りで、九州最古の木造建築として国宝指定されています。堂内は壁画が四方に描かれています。色彩が剥落して部分的に肉眼で人物等が確認できる場所が残っている位でした。かつては浄土を描いた色鮮やかな壁画だったそうですが、地域住民の集会場所や子供達の遊び場になっていた時期などがあつたそうで、親しまれていた反面、保存する事ができずにいた事は残念に思いました。

次は文殊仙寺。長い石段を登り本殿・奥の院へ。「三人よれば文殊の知恵」ということわざの発祥の地で、奥の院の岩窟から湧き出る水は「知恵の水」と言われているため、文殊菩薩のさらなるご利益があるように頂きました。少しは頭の回転が良くなるようお願いをしました。

次は両子寺へ。両子と書いて「ふたご」と読むこのお寺は不老長寿と子授け祈願としても広く知られています。両子寺にあやかっつて双子が出来たりして、と冗談を言いつつ子宝祈願と不老長寿の霊水もしっかり頂きました。この両子寺は紅葉が綺麗な寺としても有名で、ちょうど見頃でした。国東半島は石が豊富な地方で、石像が多く見られるそ

うです。ここでも仁王門があり国東半島最大級の石像と云われています。本来ならこの仁王門がある長い参道を初めに通るべきでしたが、帰る時に通りました。バスガイドの方の話によると、国東半島は石段が多いので、バスガイドでも敬遠したくなるような場所のようです。

三日目は強行スケジュールでした。まずは湯布院散策です。私の中で湯布院は、昔ながらの温泉地というイメージでしたが、行ってみてビックリ。土産物屋や喫茶店などが立ち並ぶ今風な観光地でした。ここでは観光客を増やすために街燈を増やしたそうですが、残念ながら早朝だったため分かりませんでした。

白杵石仏は日本で初めて彫刻された石仏として国宝指定され、五十九体の石仏があります。ちなみに九州では初めての国宝指定とのことです。山中を歩いて拝観したためか、それとも昨日の疲れなのか、途中足がおぼつかない時があり、運動不足を感じてしまいました。このガイドの方の話では、この石仏群はお釈迦様の幼生期から晩年までのそれぞれの姿を現しているそうです。今回は晩年から遡って拝観しました。石仏の中には建物の影になっていたために



移動中のバスの車窓に幾度も姿をあらわした由布岳

彩色が残っているものや、経文を納めた跡らしき穴を見る事が出来ました。また、この磨崖仏は立体的に彫刻されており、仏様のお顔が木彫のように表情が豊かでした。

次に訪れた二王座歴史の道では、手に入りにくい焼酎「赤霧島」を発見し、思いがけず購入。気分が高まりました。その後は九州博物館と大宰府天満宮一時間コースへ。平成十七年に開館した九州博物館は行ってみたいと前から思っていた場所でしたが、見学時間が短いために、文化交流展示室を急いで一周。今月の名品の中には、以前新聞記事で見た、水中発掘された元寇関連の遺物。さらには中尊寺の新本尊釈迦如来坐像と同じ印相が描かれた厨子が展示しており、一人で興奮していました。最後に訪れた大宰府天満宮では、境内に奉納されているたくさんの方の牛の像のうち一頭を撫でて、慌しく福岡をあとにしました。

今回の旅行は短い時間の中で、いろいろな場所を訪れ、足腰がクタクタでしたが、内容の濃いものでした。空港では惜しくも博多ラーメンを食べられず……また来るけんね。

(中尊寺職員)

日本照明賞受賞報告

中尊寺文化財管理部

金色堂の照明について、平成二十四年株式会社東芝の御厚意によりLEDに変えたことは前号で報告したとおりです。中尊寺としては、金色堂の保存環境の改善と、精緻な工芸美術を参拝の皆様によりよく見ていただくという趣旨でありました。

保存環境という点については、一つには従来の蛍光灯の器具から高熱が発せられていたことと、器具から発せられる紫外線の影響を危惧しておりました。さらに器具が不安定な形で取り付けられていたことも心配されておりました。その上で、改善の方法について検討した結果、

① 金色堂における光環境の在り方の研究、輝度を用いた明暗のバランスの検討

② C G シミュレーションを活用したイメージによる相対評価と輝度による絶対評価

③ 鏡面やルーバを用いたきめ細かい配光制御、計測と現

場実験による被照物に適した色温度と分光分布の検討

④ 躯体を傷つけずに地震にも強い施行の実施と、というようなことで施工したものです。

日本照明賞は、三十一回を数える賞です。平成二十五年九月、金色堂の照明が、「日本における照明関連技術上、画期的な業績であり、学術ならびに産業の発展に貢献するところ、誠に顕著にして世界に誇りうるものである」として、受賞になりました。有名な建築物の照明が、いくつかわノミネートされていた中での受賞ということで、喜びも一入でした。あらためて株式会社東芝・関連企業の皆様・施工等ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げる次第です。

風信 / 語録 「久遠の鐘」

バスキングジャパン 代表・戸田昌征

東北の詩魂。

貞任、能因、西行、芭蕉、啄木、賢治、小剣、巽、修司、重之…、彼らが詠った奥州。

歌枕の宝庫にして、奥浄瑠璃の歴史舞台。

今でも、そしてこんな事態でも、そんなものが在るのか。

でもきつと、それが顧みられなければ、そして再び振るい起こさねなければ、復興という掛け声も虚しいものとなるだろう。

…あの三月十一日の後、液状化で傾き電気も水道も止まった暗いアパートの中で、ジツと考え続けていました。

*

五月末、「平泉・世界遺産認定」が発表され、日本中が久々に明る

く沸きました。

直後、一つの構想が半ば見切り発車的に開始されます。

『久遠の鐘プロジェクト』

奥州の眠れる地霊を賦活化すること。

その詩神を語り寿ぐと共に、当代の優れた芸術家とその作品を捧げること。

*

タイトルは曩祖・藤原清衡公の供養願文の「鐘の音」から来ているのは言うまでもありません。

荒廃したこの地に一人残ってしまった清衡公。そのグラウンドゼロに一基の法塔を建て、万灯を点し、千界に向け打ち鳴らされた鐘。

この鐘の音は清衡公の御世から、きつとこの罹災後の東北へも

響いている。

いや全ての世界の壁を超え永劫の過去と未来へ、人外の魂さえ振るわせているだろう。願わくばいま耳在るものをして、少しでもその轟きを伝え響かせられますよう。

*

初年度は、企画／実施まで二ヶ月ナシという目の回る期間での出発でしたが、高揚した舞台を実施できたと思います。

以来、平泉の沢山の方々に協力をいただき、毎年色々な形で継続させていただいています。

*

〈二〇一二年〉

●七月（於・文化遺産センター、毛越寺本堂）：講演・千葉信胤（歴史研究家）、演奏・坂上真



清（ケルティックハープ）、藤野由佳（アコーディオン）。

●八月（於・文化遺産センター、毛越寺本堂、無量光院跡）：講演・豊島重之（演出家）、演奏・マークアキクサ（インディアンフルート）、太田光宏（ギター）、よしうらけんじ（パーカッション）



●九月（於・文化遺産センター、毛越寺本堂、無量光院跡・きゅうけい処民家）：講演・破石晋照（僧侶・狂言師）、演奏・オオフジツボ（壺井彰久（ヴァイオリン）、太田光宏（ギター）、藤野由佳（アコーディオン））
：世界遺産認定から直後の夏、三ヶ月に亘って開催。特に夕日が



沈む金鶏山を背に無量光院跡で行われた日没演奏が忘れがたい鮮烈さでした。

〈二〇一二年〉

●六月（於・観自在王院跡「平泉福興祭・駅前芭蕉館」）：演奏・オオフジツボ（壺井彰久（ヴァイオリン）、太田光宏（ギター）、

(金剛院 法嗣)

ギンリョウソウ(銀竜草)

子供のころ図鑑で見たと白い植物は、憧れの幻の植物となった。「ギンリョウソウ」森の日陰に自生しているとされるその植物は、光合成をしない腐生植物のため、葉緑素をもたず真っ白で、なるほど竜が首をもたげた姿に似ている。「ユウレイタケ」という別名も持つっており、いつかこの目でその正体は「竜」なのか「幽霊」なのかあばいてやろうと思っていた。

六月の中尊寺ウオーキングトレイルは緑につつまれていた。山中に拓いたこの道には広葉樹が生い茂り、水源もあり、自然観察にはもってこいの場所である。出会いは突然やってきた。道端に何か白いものが見えた。「キノコでも

生えているのだろうか……」少しずつ近づいてみると、幻と思っていたあの植物が、数本から十数本の群れをつくり、こちらを見守るかのように優しく佇んでいた。「竜でも幽霊でもない。この草は森の妖精だ。」その小さな白い姿は、セルロイドのような光沢を放ち、キラキラと輝いている。その姿がピーターパンをネバーランドへと案内する妖精ティンカーベルのように私の目には映った。「この妖精は、私をどこに導いてくれるのだろうか……」そんなことを思いながら夢中で写真を撮った。

数日後、かねてギンリョウソウを見てみたかったという友人を連れ、再び山に入った。あの日たしかに妖精たちが居た場所に行き、



ギンリョウソウ

二人で探したが、妖精の姿はついに見ることはできず、変わり果てた薄茶色の実が転がっているだけだった。

「もしやあの日のあの草は本当に妖精だったのかもしれない。もしやあの日、僕のためにだけ姿をあらわしたのではないのだろうか。」そう思うと一層ギンリョウソウが愛おしくなり毎年会いに行こうと決めた。

すっかり妖精の魔法にかかってしまったようだ。

藤野由佳(アコーデオンの)
：二年目、世界遺産での実演奏納の結実として、一つのアルバムが生まれました。

CD『久遠の鐘』。

前年招来されたアーティスト達がそこで感得したものを曲とし、東日本のゲルニカとなるよう祈りを込めて作られたアルバムです。

〈二〇一三年〉

●九月(於・中尊寺本堂・駅前芭蕉館)：演奏・オオフジツボ(壺井彰久(ヴァイオリン)、太田光宏(ギター)、藤野由佳(アコーデオンの))

●九月(於・中尊寺本堂・菓子工房吉野屋)：演奏・笛織絵(坂上真清(ケルティックハーブ)、中藤有花(ヴァイオリン)、野

口明生(ホイッスル)、鈴木勉(ベース)



：三年目は、中尊寺の本堂に於いて、二回にわたって演奏させていただきました。

そしてこれが機縁となり、中尊寺の公式ウェブ映像の音楽として、オオフジツボの曲「なのはな」

(藤野由佳作曲)が使われる事となりました。

*

三陸海岸の北の果ての僕の生まれた小さな家は、津波で今はありません。

東北にとつて、多くの人にとつて、あの三月十一日で剥き出しになった事どもは、物理的復旧だけでは覆えないものと思います。

物語にあふれウタがこぼれる豊穡の地へ。

東北の詩魂を呼び起こし振るわせる事を念じて、「久遠の鐘プロジェクト」はこれからも継続してゆくつもりです。

(文中敬称略)

「御詠歌の深み」

清水 真澄

今年は、中尊寺に新しい御本尊釈迦如来さまをお迎えし、開眼されました。私達も年中恒例の法要のたびにそのお姿の御前で御詠歌をお唱えし、よりいっそう、身の引きしまる思いとありがたさに満たされた一年でありました。

主な活動としましては、五月、毛越寺にて東日本大震災三回忌法要、六月、山寺にて四寺廻廊法要、九月、中尊寺にて慈覚大師遷坐開眼法要等に参列しました。奉詠奉舞等もございまして厳肅な法要に参列できましたこと、山寺では秘仏の御開帳にあたりお参りできたことは心に残る思い出になりました。

今年は、舞台発表ということはございませんでしたが、詠舞の方三名に中尊寺支部指導員としての伝授式がございました。又詠唱におきましては初心者の方も検定試験に挑

む方が増え、活気を感じております。

来年度は、福聚教会六十五周年、平和祈念沖繩大会が十月に予定されております。遠方ではございますが、ご縁あつて、戦地沖繩の地で御詠歌をお唱えし、平和の祈りを捧げられますことに感謝しつつ、今から楽しみにしております。

最後に、なにげなくお唱えしていた御詠歌ですが、年を重ねてまいりますうちに、お唱えの一つ一つに尊い教えがあり、そのお唱え方によつて深みと味が増され、自然に心の中に染みついてくるものかなと感じております。

私達の会も、高齢化になり、色々とお身体に無理なこともでてまいります。会員の皆様には健康に気をつけていただきまして、年を重ねた分ほど深みのある御詠歌のお唱えを目指して、来年度も精進してまいります。

(観音院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事)

新刊紹介

(二〇二三年一月〜十二月)

『平泉の政治と仏教(東北中世史叢書1)』

高志書院 著：入間田宣夫 二〇一三・五・二十一

『平泉文化の国際性と地域性』

汲古書院 著：藪 敏裕 二〇一三・六・十二

『平泉文化研究年報 第13号』

川嶋印刷 編集：岩手県教育委員会 二〇一三・三

『佛教藝術 329号』

毎日新聞社 二〇一三・七



『図説 平泉 浄土をめざしたみちのくの都』

河出書房新社 著：大矢邦宣 二〇一三・四

『平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―』

編集：岩手県 二〇一三・三

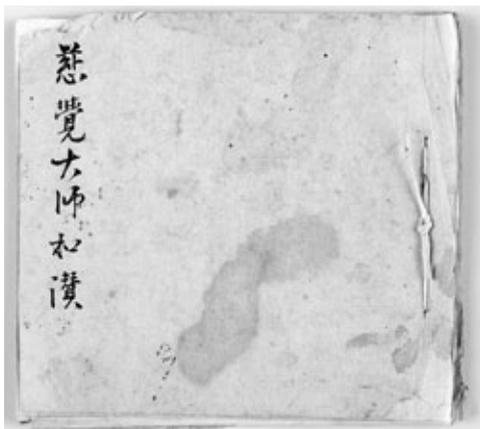
※世界遺産登録までの概要を編纂したもの。非売品。



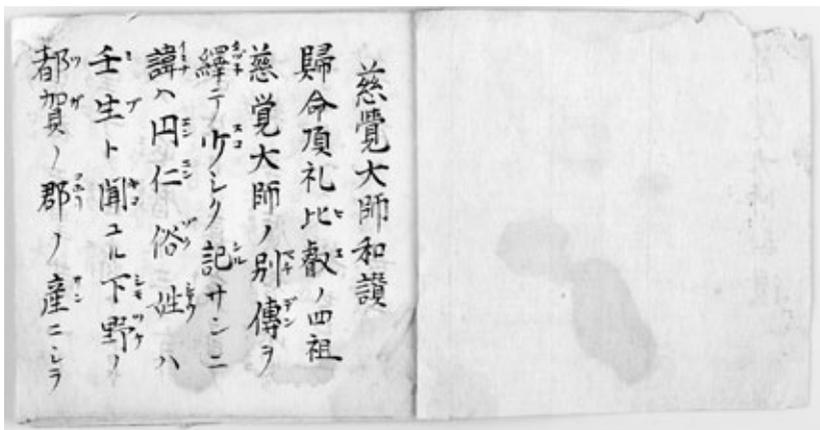
〔資料紹介〕

佐々木 邦世

※慈覚大師円仁 天長の頃「遙かに北土に向かい、広く妙典を宣揚し」、中尊寺などその開基伝説特に関東・東北の寺院に多い。法華・常行三昧確立。第三世天台座主。『入唐求法巡礼行記』



慈覚大師和讃



○下野国都賀郡に生まれる

聰明年少十ガ中
 唯一人ゾ鏡知シキ
 弘仁六年沙弥ト成
 翌年受具シテ執小ハ
 師ノ數ナレバ明ノ春
 円頓大戒ヲゾ受シ
 ソノ後誓ヲ靡ラ因ツ
 一行三昧修シヌレバ
 四十二及ニテ身モ勞レ
 我命タシカラントラ
 鷲カニ開ケキ北洞ニ
 終リテ待程兼行シ
 天ノ妙藥夢ニ得テ
 道標々チマテ健カニ

○北洞 比叡山の北
谷、横川

○弘仁十四年 円頓
菩薩戒を受く

崇神天皇第一ノ
 皇子ノ苗裔ナリトヤ
 頃ハ延暦十三年
 誕生日ノ嘉氣ヲ見テ
 大慈寺廣智大師
 予ニ與ヘヨト約セシニ
 年九歳母公ハ
 前語ヲ慎シテ付属シヌ
 性質聡敏丈五尺
 経藏中ニ誓言ヒテハ
 觀世音經搜リ得ツ
 願リニ修齋シ内典ノ
 大旨ヲ稍ク悟リケル
 母三人ノ大沙門

○延暦十三年 誕生

四種三昧ヲ修行シテ
 如法堂ラゾ造リケル
 此項遺唐使ヲエラフ
 トキニ先師ノ夢告ミ
 入唐求法セシメラン
 但浪凡ニ漂ヨハン
 舟中辛苦ヲ慙メリ
 果シテ請益教アリテ
 承和五年ノ六月ニ
 大使藤ノ朝臣ト
 太宰府ヨリゾ護鮮
 万里ノ洪濤楫ヲ折リ
 危キ一モ多カリテ
 開成三トセノ七月ニ

○如法堂造立

「請益」法門の伝授
を請う
○入唐求法の請願
（承和五年（四十五
歳）

笑ラ含テモノガタル
 是ハ叡山ノ大師ゾト
 示スラ謝ラ慕シキ
 意ヲ廣智ハ知ヌレバ
 叡山大師ニ属シケル
 大同三年十五歳
 夢相ニ違ハヌ師ヲ仰ギ
 常ニ謹ミ事フレバ
 鑑受フカク止觀ナル
 真俗ニ諦ノ不生滅
 世人未ダ解セザレバ
 汝此義ヲ流傳シテ
 円意ヲ弘通セヨカレト
 文義ノ骨髓授カリテ

○大同三年 比叡山
に登る

「円意」法華円經
の本意

持赤テナグサメ奉ル
 刺史ハ旅糧ヲ施シ又
 竜興寺ニ到レルニ
 副使モ盛唐供養シ
 判官蕭慶中ヨリゾ
 禪法門ヲツタヘケル
 五臺山ニ登リテハ
 諸徳ニ認シテ主客トモ
 タガヒニ文殊ト疑ヒヌ
 北臺ニテハ山上ノ
 雲霧ガ中ニ一食ヲノ
 可畏ノ師子ヲ顯シ
 普通院ノ房ヨリハ
 五色ノ放光祥雲ノ

○五臺山に登る

「可畏」畏るべき

揚州海陵縣ニ着
 府中ノ開元寺ニ入リ
 節度使監軍立代リ
 惠施スル絹ハ十余匹
 アマチク寺僧ニ手ヘラツ
 其一分ヲ鑿シケル
 上部、高僧宗睿ニ
 悉曇梵學研究シ
 全雅阿闍梨ニ金頂ノ
 灌頂曼荼羅相傳フ
 ハクモ四年帰期至リ
 海上タチマケ逆凡ニ
 吹テラ海舟東ニヨル
 宿願遂ント身ヲ抽テ

○揚州開元寺に入る

○「身ヲ抽テ」身を
 隠す

師ノ頂上ヲ照セルヲ
 數十僧見テ驚歎ス
 志遠和尚ニ台教ヲ
 三十七卷傳寫シツ
 南臺ニテハ聖燈ノ
 普ク照スヲ見玉ヒヌ
 文殊閣ノケ造リレハ
 コノ感應ノ故トカヤ
 八月長安城ニシテ
 上將軍ノ仇士良
 養シテ元政阿闍梨ヲ
 金潼ウケツ明年ニ
 義真ニ從ヒ胎灌頂
 並ニ獲悉地傳ヘケル

○志遠に学を受く

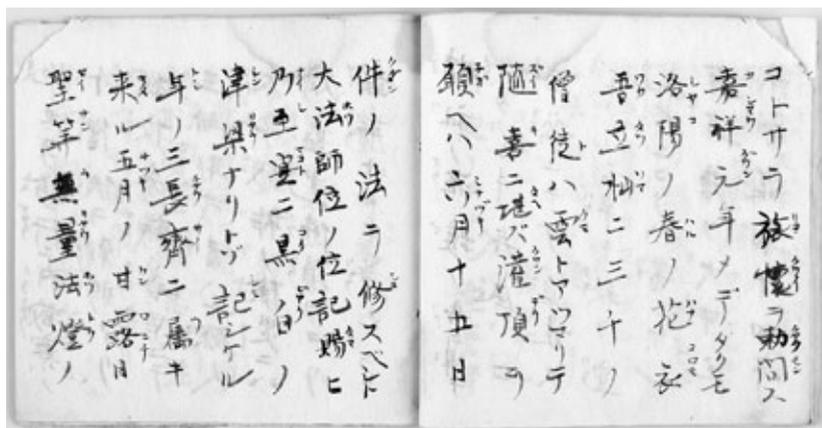
○長安に入る

○大興善寺の元政に
 金灌頂

○青龍寺の義真に胎
 灌頂ならびに蘇悉
 地の大法を受く

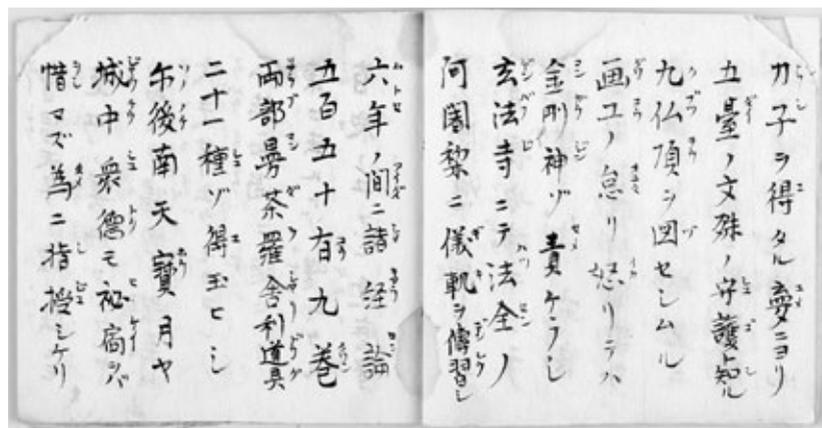
東海縣ニトマレバ
 日暮シ路ヲ海賊モ
 惹心ヲ起シテ送りケル
 弟ニノ船モ凡アシク
 ス又登州ヘ吹モトス
 冥護ヲ赤山明神ニ
 請テ本願成セント
 祈ルアル夜ニ大千ヲ
 カクル杵子ヲ買得タル
 エメ見テ無上ノ法門ヲ
 得ベキ驗シト敬ビ又
 新羅ノ張詠曾テ我
 國恩アリト宿望ノ
 聖跡巡礼ユルレ文

○登州 赤山法華院
 に入る



○嘉祥元年

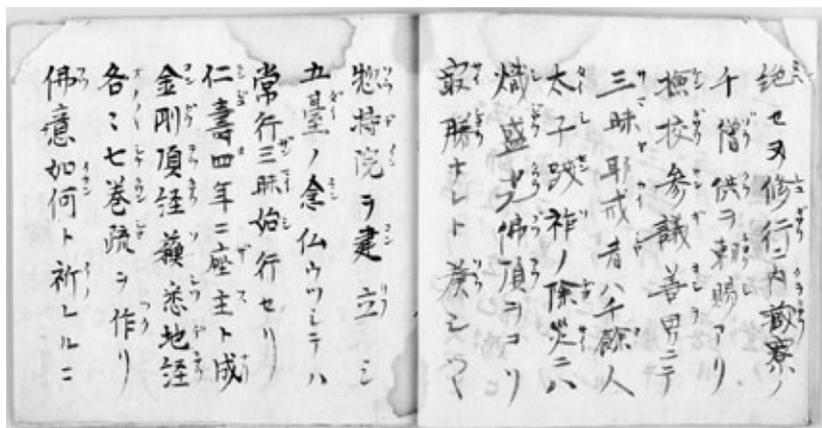
○比叡山



○玄法寺の法全に儀軌伝習

○六年の間に
經論五百五十九卷
兩部曼荼羅他
二十一種を得る

「秘扇」かんぬき、
秘奥の法



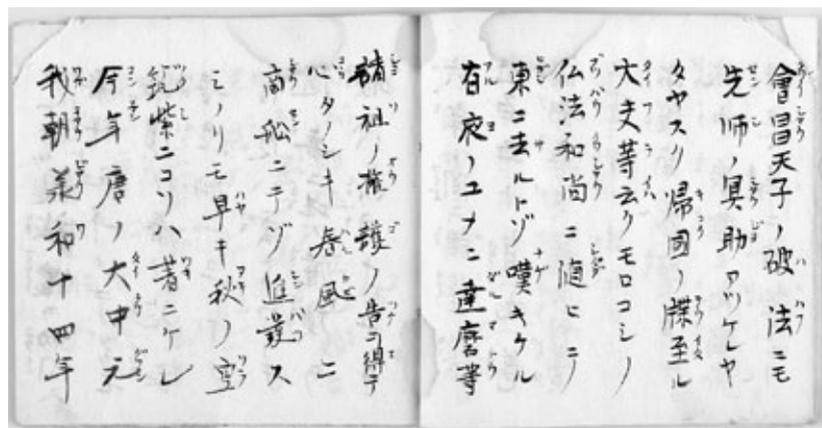
○熾盛光仏頂儀軌

○惣持院建立

○常行三昧を始行

○仁寿四年 天台座主

○「蘇悉地經疏」七卷



○會昌の破仏

○承知十四年
(五十四歲)

曉夢ニ日輪射ルト見テ
 冥感アリテ後ノ世ニ
 傳ハルベシト知りタマフ
 貞觀元年大内ニ
 徵セラ 菩薩ノ大戒ヲ
 法号トモニ授ケハル
 ツイテ都鄙ノ受戒人
 灌頂男女合シテハ
 凡ソニ千人余ナリ
 頭場大戒論モ成
 聖名埋ミテ宿願ノ
 文殊榜ヲツ造立ス
 コノ程熱病患ヒテツ
 六年正月十三日
 黄昏タチマテ流星アリ
 翌旦弟子ノ一道ハ
 房中ニ立自樂ナルヲ聞
 大師ハ諸事ヲ了シ
 乃チ淨身香ヲ燒
 大毘盧遮那仏四親近
 每名侍者ニ誦セシメテ
 自ラ弥陀ヲ念ジツ、
 相子ノ刺ニイタルコロ
 北首右肩ニシテコソハ
 永ク遷化シ玉コケレ
 時ニ春秋七十ニ
 薨ハ四十九年ニテ
 實ニ貞觀六年ノ

○自らは弥陀を念ず
 ○遷化 春秋七十一
 ○貞觀六年正月十四日

諸弟子ニ遺誡シテ
 遍照所ホ大法ハ
 安惠ニ授ヨ門徒業
 楞嚴院ヲ修繕セヨ
 好學輩ハ経論ヲ
 他處ニナ移シテ承リ見
 禪院建立センコトハ
 彼土ニ在シ日赤山ノ
 神ニ契レテ宿願ゾ
 同志カナラズ果スベシ
 我沒後ニハ樹ヲ植テ
 タゞ其シレテ遺スベシ
 此外遺命多カレド
 要ラ摘ンデコニ載ス

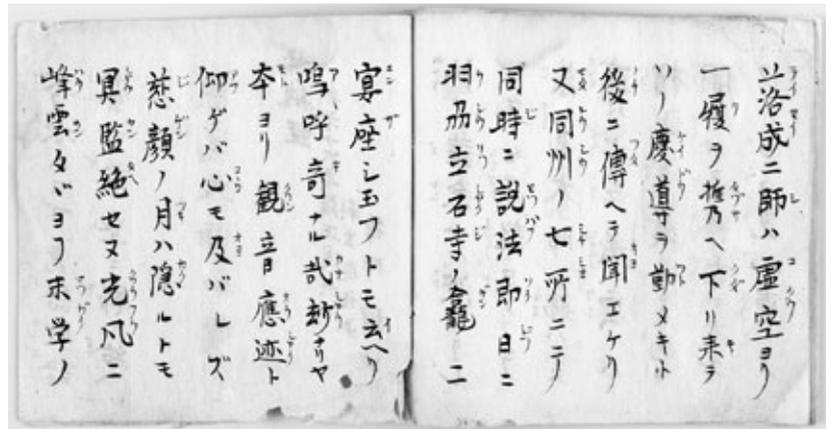
○貞觀元年
 ○内裏に召され
 清和天皇に授戒

西月十有四日ニテ
 知モ不知モ悲惜セリ
 大師天性寛柔ニ
 喜怒ヲバ色ニ形ハサズ
 身ハ滄溟ヲ渡リ得テ
 三密一乘ミナモトラ
 難厄凌ギテ窮メレハ
 仙ノ誑念ゾ深カリレ
 ハ年七月諡号ヲラ
 慈覺大師ト賜ハリ又
 或ハ上皇承雲ハ
 棺上隻履ノミヲ見ツ
 開ケバ灵体在マサズ
 コノ日日光山堂ノ

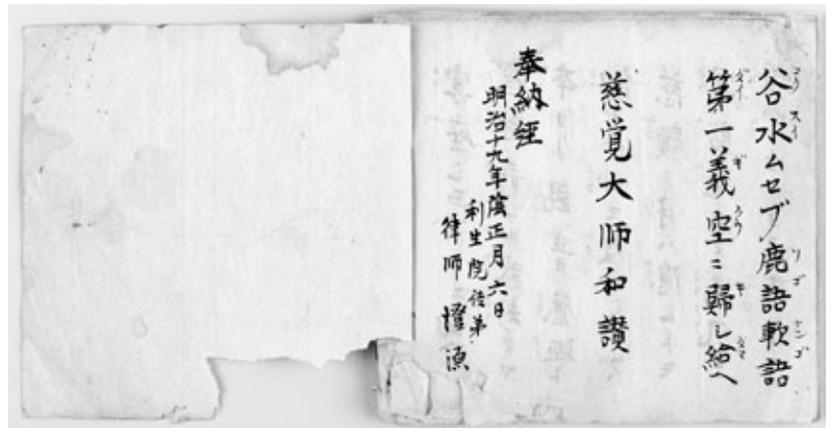
○貞觀八年 諡号を
 慈覺大師と賜る

○日光山

遺誡
 安惠に託す



○ 出羽立石寺



○ 中尊寺山内利生院 徒弟
菅野 澄源
(書写時三十二歳)
(天正十一年 癸・六十八)

〔関山句囊〕

〔第五十二回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〕
(平成二十五年六月二十九日 於毛越寺)

(當日句入選)

竹皮に焼き飯ふたつ芭蕉祭 (大会長賞)

* 矢島 渚男選 特選 奥州 中村セイ子

地震三年あやめ浄土に集い来よ (中尊寺貫首賞)

特選 一関 高橋 悦朗

撮り終へて旅人あやめに一礼す (毛越寺貫主賞)

特選 一関 桂田 一穂

梅雷雨をよぶがに龍頭鷓首かな

秀逸 奥州 岩渕 正方

門前の墓に出自を問ひにけり

秀逸 一関 伊東 静枝

礎石守る一樹一草梅雨じめり (岩手県知事賞)

* 佐治 英子選 特選 北上 伊藤ふみ子

神木の間に寝釈迦山滴る (河北新報社賞)

特選 奥州 鈴木 秀悦

遣水の音にそひゆく梅雨の蝶 (平泉観光協会会長賞)

特選 花巻 菅野 トシ

庭涼し庫裏より望む翁道

秀逸 平泉 佐々木邦世

平安の言の葉拾ふあやめ園 (岩手県議会議長賞)

* 小畑 柚流選 特選 奥州 小野寺昭次

麦秋や柳の御所に井戸ひとつ (岩手日報社賞)

特選 宮城 京極 久也

み佛のまなごしはるか青葉潮 (中尊寺賞)

特選 金ヶ崎 松本 雅子

玉手箱開けてあやめや老女舞

秀逸 平泉 菅原恵美子

六月の浄土在来線でゆく (平泉町教育長賞)

* 小菅 白藤選 特選 奥州 熊谷 勅子

麦秋や柳の御所に井戸ひとつ (岩手日日新聞社賞)

特選 宮城 京極 久也

妻とあるごとくにあゆむあやめ園 (毛越寺賞)

特選 奥州 岩淵 正方

英句碑を読み尽したるかたつむり

秀逸 平泉 鈴木 信

延年の舞にも似たる花菖蒲 (平泉文化会議所賞)

特選 花巻 中村 青路

翠巒を水面に平安浄土かな (岩手日報社賞)

特選 秋田 森屋 慶基

安心の風渡りあし白菖蒲 (岩手日日新聞社賞)

特選 盛岡 草花 一泉

青菘を縫うて遣水音軽し

秀逸 北上 鉄本 正人

光りあふ寺を飛び交ふ梅雨の蝶 (平泉観光協会会長賞)

*照井 翠選 特選 八幡平 佐々木一夫

堂涼し被災の松の地蔵尊 (河北新報社賞)

特選 北上 及川由美子

白蝶の浄土めぐりと見えにけり (岩手日日新聞社賞)

特選 盛岡 草花 一泉

赤松の影の傾く梅雨の池

秀逸 北上 及川 文子

(応募句入選)

蘇生して浄土はこの世風薫る

*矢島 渚男選 (天) 愛知 関 英治

鉄浸す種漬花のかたはらに (地) 盛岡 草花 一泉

溝浚へ哀楽ともに生きる村 (人) 奥州 大石 文雄

封人の焚かぬ夏炉の湿りかな 秀逸 山形 柴田 汀石

啓蟄の風つつぬけに農具店

*佐治 英子選 (天) 千葉 小池 成功

シベリアの抑留を生き麦を踏む

(地) 盛岡 及川 永心

竣工のダムに満ちたる雪解水

(人) 奥州 菊地 良子

関山の風ぞんぶんに鯉幟

秀逸 花巻 菅野 トシ

三衡を探る晩学余花の寺

*小畑 柚流選 (天) 宮城 吉田 貞女

義経は永遠に若武者すみれ濃し

(地) 花巻 中村 青路

千年の礎石に落花毛越寺

(人) 宮城 小野寺瀧青

蝌蚪群るる世界遺産の心字池

秀逸 奥州 小野寺テル子

高僧と会釈かはせり朝桜

*小菅 白藤選 (天) 奥州 菅野 好子

薫風や梵字が池に水ゆらぐ (地) 平泉 菅原 杏子

石鮪玉雨情の歌碑を越して飛ぶ (人) 大阪 穂山 常男

青大将お前も世界遺産なり 秀逸 東京 竹田 吉明

囀やきざはしゆるき光堂 *小林 輝子選 (天) 愛知 城山 憲三

桜蕊降るバドックの騰り馬 (地) 宮城 及川 源作

竣工のダムに満ちたる雪解水 (人) 奥州 菊地 良子

骨寺の古地図のままに田水張る 秀逸 平泉 鈴木 信

遠蛙いつか男は眠りけり

*照井 翠選 (天) 一 関 伊藤けんた浪

畦塗を終へ月光の水通す

(地) 一 関 小野寺束子

咲く前の枝揺らすのは花の夢

(人) 宮城 宇津志勇三

母が折る亡き娘に似せる紙ひいな羅

佳作 大船渡 斎藤 陽子

・秀逸は、各選者応募句から十句、当日句から五句あり、
そのうちの一、二を汲みとつた。

児童生徒

平泉小学校

満開のしだれ桜をゆらす風

特選 六年 菅原 拓

花火はね空にらく書き楽しいな

特選 四年 浅利寅之介

たんざくの願いよとどけ星の空

特選 五年 小野寺恰香

長島小学校

母の日にかたもみけんのプレゼント

特選 二年 岩淵 華那

ばあちゃん畑草とりつばめとぶ

特選 三年 千葉 心寧

わた毛がねひゅんとかぜでとばされる

特選 三年 石川 歌純

平泉中学校

入学式新しい道を歩みだす

特選 一年 千葉瀬衣羅

衣更肌の境目色違い

特選 二年 岩淵 任哲

義経が今よみがえる初夏の時期

特選 二年 鈴木 由布

(平成二十五年二月〜二十六年一月)

菊脴秀衡塗の祝膳

『寒雷』二月号 小野寺束子

野外能

秋落暉浴び奏風の鏡板

法師蟬薪奉行の火入れの儀

能一管盆の清夜を貫けり

篝火は門火の色に野外能

秋灯や金系耀く能衣装

父と子の「伊の字」問答秋の宵

弦月を上げ光堂鎮もれり

『寒雷』十一月号 佐藤 瑞穂

僧の足す牡丹供養の一枝かな

『草笛』二月号 小林 輝子

焼べたして牡丹供養の読経かな

『草笛』二月号 稲玉 宇平

寒行の風に乗る経舞ひ込めり

『草笛』四月号

佐藤 千洋

じぐざぐにのぼる凍坂中尊寺

『草笛』四月号

古川 和子

義経堂越えてくの字や鳥帰る

『草笛』六月号

鈴木道紫葉

春雪に金の色せり金色堂

(草笛総会俳句大会)

福島 清

金色堂汗の外人目を凝らす

往来に居据る猫や明易し

開帳のみやげに貫ふ念仏香

『草笛』八月号

駒井 勝子

結葉や瀬音高なる義経堂

『草笛』八月号

岩渕 洋子

青邨の旅の句碑あり花すみれ

『草笛』八月号

木村 利子

漆搔く金色堂をまなうらに

「県民文芸集」入選

下斗米八郎

夏雲やこたびは寄らぬ平泉

『毎日俳壇』8/26

大峯あきら

夕かはず金色堂を遠巻きに

『河北俳壇』6/30 仙台

當摩さところ

威銃東稻山が打ち返す

みちのく「二夜庵」大会 特選 一関

小野寺東子

燦として丈六の釈迦風光る

一関俳協 三月 佐々木邦世

開眼に慈悲耀うて春の坊

一関俳協 四月 佐藤 冬扇

胸高に持つ僧の桶放生会

一関俳協 九月 小野寺東子

どこまでが秀衡が跡冬の鴉

一関俳協 十二月 小野寺東子

骨寺の米奉納や雪浄土

一関俳協 十二月 江原 遅筆

月見坂登り切ったる初景色

一関俳協 一月 伊藤けんた浪

関山の鐘の余韻や去年今年

一関俳協 一月

稲玉 宇平

町へ出て何を語らむ修司の忌

『たばしね』五月号

佐々木邦世

野仏の背よりしたたる余花の雨

『たばしね』五月号

岩渕 洋子

触れあはず空へ一途の今年竹

『たばしね』六月号

鈴木 四郎

木漏日を動かしてゐる夏の蝶

『たばしね』六月号

鈴木 信

施餓鬼寺僧の衣へ素風かな

『たばしね』九月号

岩渕 洋子

横笛の止みし本堂つくつくし

『たばしね』九月号

鈴木 信



〔関山歌籠〕

(平成二十五年四月二十一日)

〈第三十四回西行祭短歌大会入選歌〉

*小高 賢先生選

スカートの長い短い注意するその日アフガン
少女撃たれぬ (中尊寺貫首賞)

盛岡 菊池 陽

ふり向かぬ約束をして街角に末期うち明けし
友と別るる (平泉町長賞)

盛岡 遠藤 吉光

振り返るたび立ち止まる猫のみて吾は呟く「だ
るまさんころんだ」 (平泉観光協会長賞)

盛岡 藤井 永子

買ひ物は耳遠き父賄いは足弱き母と二人で一人
(岩手日報社賞)

奥州 遠藤カオル

母植ゑし「鳩泣かせ」とふ枝豆の旨きを偲ぶ
通夜に集ひて (IBC岩手放送賞)

一関 岩渕 初代

額紙つけて位牌を抱くぢぢはお化けのやうと
曾孫らはしやぐ (岩手日日新聞社賞)

奥州 菊池 秀子

御神事能番組

平成二十四年五月四日

法樂
古美式三番

開口 三浦 章興 大鼓 佐々木五大
祝詞 千葉 快俊 小鼓 菅原 光聰
若女 菅野 澄円 笛 清水 秀法
老女 破石 晋照 後見 佐々木秀厚

能
後シテツレ 佐々木五大
前シテツレ 佐々木亮王
シテ 北嶺 澄照 大鼓 千葉 快俊
竹生島 ワキ 菅野 成寛 小鼓 佐々木仁秀
ワキツレ 佐々木秀厚 太鼓 菅野 宏紹
アイ 破石 晋照 笛 清水 広元

五月五日

開口 三浦 章興

狂言
いろは かな法師 北嶺 航
父 破石 晋照

能
シテツレ 佐々木亮王 大鼓 佐々木長生
シテ 佐々木五大 小鼓 菅原 光聰
西王母 ワキ 佐々木秀厚 太鼓 三浦 章興
ワキツレ 菅野 成寛 小鼓 菅野 澄円
アイ 破石 晋照 笛 菅野 澄円

秋の藤原まつり 中尊寺能 十一月三日

能
シテ 佐々木五大 大鼓 菅野 宏紹
猩猩 ワキ 佐々木秀厚 小鼓 菅原 光聰
ワキツレ 佐々木秀厚 太鼓 佐々木長生
笛 清水 秀法

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成二十四年十一月三十一日〜平成二十五年十一月三十日

□ 平成二十五年

三月二日

布教師養成所並び人權啓発研修会 於毛越寺
 布教師養成所講師 天台宗教学部長 齊藤圓眞師
 講演「今思う 慈覚大師」
 人權啓発講師 人權啓発委員 三浦章興師
 「狭山事件より学ぶ」
 中尊寺より十八名参加

六月八日〜九日

天台青少年比叡山の集いリーダー研修
 於延暦寺会館

一山より 清水秀法出仕参加

八月二十六日〜二十九日

教師安居会 於比叡山・西塔「居士林」

一山より 佐々木亮王出仕
 九月七日

二部檀信徒会一隅大会 於毛越寺
 中尊寺檀徒七名参加

集まった浄財

七三、〇〇〇円は地球救援募金へ

十一月二十二日

天台宗一斉托鉢 於満福寺
 山内より七名参加
 集まった浄財

二二五、二七七円は地球救援募金へ

□ 役職任免

(平成二十五年二月四日)

平成二十五年二月二十五日の天台宗海外開教
 並びハワイ別院四十周年記念慶讃四箇法要特定布教

中尊寺 山田俊和

大長寿院 菅原光中

(平成二十五年四月一日)

天台宗典編纂所 編纂委員

圓乗院 佐々木邦世

天台宗典編纂所 電子仏典員

瑠璃光院 菅野康純

(平成二十五年四月一日)

一隅教区本部理事

教区寺院婦人会会長

金剛院寺婦 破石貞子

(平成二十五年四月二十日)

山家会講経論義二之問勤土畢

大長寿院 菅原光中

(平成二十五年五月二十日)

天台宗海外伝道事業団理事

観音院 清水広元

(平成二十五年九月十二日)

一隅を照らす運動副会長

中尊寺 山田俊和

(平成二十五年十月一日)

天台宗人權啓発委員会企画委員

法泉院 三浦章興

□ 教師補任

(平成二十五年四月九日)

大僧都 金剛院 破石澄元

(平成二十五年四月二十一日)

権僧正 瑠璃光院 菅野康純

大僧都 大徳院 菅原光聰

執務日誌抄

平成二十四年十二月一日

二十五年十一月三十日

平成二十四年

◇十二月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 文化庁次長河村潤子氏来山(執事長挨拶)
- 四日 東北復興支援一〇〇〇人プロジェクト JTB社長堀好治氏来山(執事長挨拶)
- 七日 薬師会(讃衡蔵)
- 九日 骨寺村莊園米納め式(経蔵)
- 十日 泉倉寺一島正眞師来山(貫首)

- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 秋期一山会議(大広間)
- 十三日 初詣警備会議(管財 於泉橋庵)
- 十四日 弥陀会(本堂)
- 十五日 平泉町観光振興計画策定委員会(総務広元 於役場)
- 十六日 境内一斉清掃
- 十七日 お経を読む会(真珠院)
- 十八日 白山会(本堂)
- 十九日 中尊寺節分講中総会(法務 於泉橋庵)
- 二十一日 平泉町交通安全運動推進町民大会(総務 於役場)
- 二十二日 IBC岩手放送社長阿部正樹氏来山(貫首)
- 二十四日 文殊会(経蔵)
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

平成二十五年

◇一月

- 一日 ○時 新年祈祷護摩供修行
七時 東山町(若水送り)着
九時半 正月祈祷護摩(本堂)
十時半 総礼
- 修正会 釈迦供(本堂)
- 冬堂籠り(五日 結衆、開山堂)
- 二日 九時半 正月祈祷護摩(本堂)
修正会 薬師供(峯薬師、讃衡蔵)
- 十四時 謡初め(広間)
- 三日 九時半 正月祈祷護摩(本堂)
修正会 山王供(山王堂)
- 十二時 元三会 慈恵供(本堂)
- 四日 修正会 薬師供(瑠璃光院薬師堂)
- 五日 修正会 文殊供(経蔵)
- 六日 修正会 釈迦供(月山供(釈迦堂))
- 七日 修正会 白山十一面供(本堂)
大般若会(本堂)
- 修正会 弥陀供(讃衡蔵)

- 八日 修正会 薬師供(讃衡蔵)

一字金輪仏法楽

修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 元平泉町消防団分団長千葉功氏 瑞宝単光叙勲祝賀会(管財澄元 於武蔵坊)
- 十四日 慈覚会(御影供 本堂)
お経を読む会(貫首)
- 二十三日 文部科学省政務官丹羽秀樹氏来山(執事長挨拶)
- 二十四日 埼玉大学教授加藤基氏来山(執事長挨拶)
- 貫首 対談(多田孝文大正大学 学長 於東京)
- 二十七日 文化財防火訓練
- 二十八日 平泉芭蕉祭全国俳句大会幹事会(参与邦世 於役場)
- 二十九日 念法真教務総長桶屋良祐師来山(貫首)

東芝東北支社長茂野誠氏来山(貫首・執事長)

◇二月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 恒例大節分会(振分親方、歳男歳女百一名、町内園児)
- 十一日 平泉町観光振興計画策定委員会(総務 於役場)
- 十四日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十五日 涅槃会(御逮夜(本堂))
- 二十五日 涅槃会(本堂)
お経を読む会(観音ノ秀法)
- 平泉町世界遺産地域協議会(執事長 於平泉文化遺産C)
- ◇三月
- 一日 月次大般若(本堂)
- 四日 復興祈願護摩供(十一日、貫首・一山僧侶 不動堂)
- 六日 曹洞宗右手泉宗務所様来山

(総務)

- 十一日 天台宗東日本大震災三回忌回向法要(貫首 於気仙沼観音寺)
- 陸前高田献花台慰霊法要(執事長・金剛院・章興・澄円・五大)
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 境内一斉清掃(十三日)
- 春期一山会議(大広間)
- 十五日 岩手県観光協会賛助会員全員協議会(総務広元 於盛岡グランドH)
- 十六日 越中おわら風の盆奉演(本堂)
- 十八日 私大ネット南三陸宿舍落慶式(貫首・澄円 於南三陸町)
- 平泉古事の森育成協議会(管財章興 於役場)
- 十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂)
お経を読む会(大長寿院)
- 二十日 春彼岸会法要(法華三昧 本堂)
- 二十二日 平泉町観光振興計画策定委員会(総務広元 於役場)

二十二日 ドイツ ラインラントトリプファル

ツ州家庭省副大臣ゴットシュ
タイン氏来山(執事長挨拶)

源義経公東下り保存会定期
総会(総務 於滝沢魚店)

二十四日 **中尊寺本堂新本尊開眼法要**
(本堂)

二十五日 貫首 インタビュー(比叡の光
二十七日 総本山知恩院おてつき運動
本部様団参

二十八日 平泉観光推進実行委員会総
会(執事長 於役場)

平泉町観光審議会(執事長
於役場)

二十九日 立正佼成会花巻教会様来山

◇四月

一日 月次大般若(本堂)

中尊寺新事務局発足

三日 東芝執行役専務渡辺敏治氏・
茂野誠氏・七尾智之氏来山
曼殊院執事長松景崇誓師来山

(参与澄順 応接)

六日 骨寺村荘園交流館「若神子亭」
展示棟オープニング式典
(貫首・光聰)

八日 仏生会(本堂)
お経を読む会(円乗ノ五六)

十日 本寿院様団参
春の藤原まつり「源義経公東下
り行列」主要役者役記者発
表(執事長 於役場)

十一日 金澤翔子書道展(十四日、本堂)
十三日 天台宗陸奥教区寺庭婦人会
総会(執事長 大広間)

十四日 恒例花まつり子供大会
十五日 貫首 法話(東京声明の会様
春の藤原まつり交通警備会
議(執事長・総務快俊・管財澄円・
章興 於芭蕉館)

十七日 表千家流茶道水月会若手支部長影
山紘子氏来山(総務)

十九日 平泉商工会青年部通常総会
(法務宏紹 於商工会館)

二十日 龍澤寺本葬儀及び結制参与
秀圓 於龍澤寺)

二十一日 西行法師追善法要(本堂)
第三十四回西行祭短歌大会(講
師小高賢氏「人生の歌 歌の人生」
総代・世話人会総会(於武蔵坊
群馬教区寶禪寺様団参

二十二日 貫首 座主猥下・本山・天
台宗務庁訪問(本堂新本尊開眼
法要御礼)

二十四日 讚衡蔵運営委員会
弁慶力餅競技保存会総会
(秀厚 於芭蕉館)

二十五日 桜友会清掃奉仕(於北坂)
二十六日 平泉町世界遺産推進協議会役
員会(執事長 於平泉文化遺産C)

二十八日 中尊寺丈六釈迦如来像開
眼・東日本大震災物故者追
善供養献茶式(裏千家鵬雲齋玄
室大宗匠 本堂)

三十日 駐日台北経済文化代表沈斯淳御
夫妻来山(執事長案内)

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列

郷土芸能奉演(一関 行山流舞
川鹿子躍)

二日 開山護摩供(開山堂)
酒田三十六人衆須藤様来山(総務)

春の藤原まつり「源義経公
東下り行列」レセプション
(総務快俊 於武蔵坊)

郷土芸能奉演(江刺 行山流角
懸鹿躍/一関 市野々神楽)

三日 源義経公東下り行列(義経公
役 俳優 平岡祐太氏)

郷土芸能奉演(川西念佛剣舞)



四日 古実式三番
能「竹生島」
狂言「仏師」

郷土芸能奉演(胆沢 行山流都
鳥鹿踊/平泉 達谷窟毘沙門神楽
/胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞)

五日 古実式三番「開口」
能「西王母」
狂言「いろは」

東芝前社長佐々木則夫氏来山
(貫首・執事長・管財応対)

六日 山王講(山王堂)
裏千家淡交会若手南支部田中倫
代氏来山(貫首)

七日 菊まつり協賛会総会(大広間)
兵庫教区潮海寺様団参

八日 福聚教会南総本部様団参
森川宏映探題猥下・延暦寺執
行武覚超師来山

福聚教会福島本部様団参
福聚教会東日本大震災慰霊
法要三回忌(貫首・執事長 於

九日 毛越寺)
世界遺産推進協議会総会
(執事長 於役場)

十四日 慈覚大師一千五十年御遠
忌御祥当御影供法要(貫首
於比叡山延暦寺)

福島県国見町新町長太田久雄氏
来山(執事長)

十六日 岩手県観光協会賛助会員全
員協議会(総務快俊 於久慈グ
ランドH)

「ILC誘致と平泉」を考え
る会研修会(執事長 於武蔵坊)

十七日 ウエーサカ仏教会総会(法務
康純 於一関松竹)

十八日 第十六回仙台青葉能(貫首 於
仙台電力ホール)

十九日 気功・太極拳奉演(全日本太極
拳協会岩本美佐穂氏他 本堂)

お経を読む会(積善院)

二十一日 一関警察官友の会役員会
(執事長 於一関警察署)

- 二十二日 一関地区交通安全協会理事
会(執事長 於ペリーノH)
- 二十三日 (社)岩手県文化財愛護協
会(管財澄円 於岩手県立博物館
京都真如堂理正院様団参
平泉観光協会理事会(執事長
於観光協会)
- 二十四日 第五十二回平泉商工会通常総
会(執事長 於商工会館)
- 二十六日 北総教区西定寺様団参
曲水の宴(執事長 於毛越寺)
- 二十七日 平泉芭蕉祭全国俳句大会実
行委員会(参与邦世・総務快俊)
- 二十八日 駐日イスラエル特命全權大使ニシ
ム・ベンシトリット氏来山
(執事長挨拶)



- 二十九日 平泉観光協会総会(執事長
於商工会館)
 - 二十九日 一関地区交通安全協会通常
総会(執事長 於ペリーノH)
 - 三十日 曹洞宗千葉県宗務所様団参
 - 三十一日 一山互助会総会
- ◇六月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 三日 長命寺様来山(貫首挨拶)
 - 四日 四寺廻廊総会(執事長・総務・
法務 於電通東日本仙台支社)
 - 四日 伝教会(御影供 本堂)
 - 四日 南総教区萬福寺様団参
 - 四日 世界遺産平泉の日を実現さ
せる会設立総会(執事長 於岩
手県商工会連合会館)
 - 六日 山梨東圓寺様・法性寺様団参
栃木教区圓林寺様団参
 - 八日 第四十四回喜桜会連合会大会
(於能舞台)
 - 八日 第二十一回ふるさと平泉会総
会

- 二十九日 平泉観光協会総会(執事長
於商工会館)
 - 二十九日 一関地区交通安全協会通常
総会(執事長 於ペリーノH)
 - 三十日 曹洞宗千葉県宗務所様団参
 - 三十一日 一山互助会総会
- ◇七月
- 一日 月次大般若(本堂)
 - 二日 平泉水かけ神輿警備会議
(管財章興 於平泉商工会館)
 - 三日 岩手日日新聞社九十周年式
典(貫首 於ペリーノホテル)
 - 四日 ウィーンフィル奉納コン
サート(本堂)
 - 六日 平泉町消防団第五分団研修



於武蔵坊)

- 二十六日 貫首インタビュー(岩手日報社)
- 二十七日 貫首 講話(総務快俊同行 於多聞院伊澤家)
- 五郎沼・古代蓮まつり(参与秀圓・管財章興 於紫波町)
- 二十一日 桜友会清掃奉仕(於北参道)
- 三十二日 三千院門跡門主小堀光詮大僧正本葬(貫首)

◇八月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 「平泉の文化遺産」世界遺産登録二周年記念講演会(管財澄円 於ペリーノホテル)
- 立正佼成会墨田教会長齋藤高市氏他来山(貫首挨拶)
- 四日 世界宗教者平和の祈りの集い(貫首 於延暦寺)
- 十五日 十五時半(平和の鐘)打鐘
- 五日 群馬教区普門寺様団参
- 六日 平成二十五年全国新酒鑑評会

金賞受賞並びに両磐酒造(株)工場改装落成祝賀会

- 七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)
- 長島時子先生来山(管財)
- 十一日 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十四日 第三十六回中尊寺新能半能「敦盛」
- 狂言「伊文字」
- 能「車僧」
- 十五日 未来に語る芸術の会山崎理恵子氏他写生会(本堂前)
- 平成二十五年平泉町成人式(総務快俊 於平泉文化遺産センター)
- 十六日 第四十九回平泉大文字送り火貫首 講話(新宗連羽野総支部岩手県集會 於ホテルグランシエール花巻)
- 二十日 観福寺施餓鬼会(真珠院・観音院・瑠璃光院)

毛越寺施餓鬼会(円乘院・宗務光聰)

- 二十一日 戸津説法(杉谷義純師)聴聞(貫首 於東南寺)
- 二十二日 玉川学園ハンドベル部様奉演(本堂)
- 二十三日 施餓鬼会御速夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)
- 二十五日 玉川学園中学年オークストラ部様奉演(本堂)



- 三十一日 龍王寺恒例大施餓鬼会(執事長神社)

◇九月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 三日 瀬見温泉亀割観音祭礼(宏紹泰衡公御月忌(金曼供 本堂) 群馬遍照寺様団参)
- 六日 『レゴ・ブロック』で作った世界遺産展PART3オープニングセレモニー(執事長於一関なのはなプラザ)
- 十一日 浅草寺様団参
- 東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
- 十二日 埼玉教区松福院様団参
- 第一回「世界遺産平泉の日」検討懇話会(執事長 於県庁)
- 十三日 平泉観光協会理事会(執事長 於観光協会)
- 十四日 三陸郷土芸能奉演(江繋鹿踊り)

五郎沼薬師神社例大祭(参与秀圓 於同神社)

- 十五日 第五十九回平泉町敬老会(総務快俊 於平泉中学校体育館)
- 三陸郷土芸能奉演(津軽石さんざ踊り・槻沢剣舞・門中組舞)
- 十六日 三陸郷土芸能奉演(城山虎舞・赤澤鎧剣舞)
- 十七日 藤原経清公命日祭(参与光中 於奥州市江刺区)
- 白符忌(本堂)
- 十九日 トヨタ本社専務寺師茂樹氏・常務小寺信也氏他来山(執事長挨拶)
- 二十日 赤堂稲荷例祭(護摩供)
- 日本照明賞祝賀パーティー(貫首・章興 於帝国ホテル東京)
- 二十三日 慈覚大師像本堂御遷坐(十月十四日)
- 慈覚大師パネル展(十月六日)

慈覚大師像御遷坐法要(本堂)

- 秋彼岸会法要(本堂)
- お経を読む会(金剛ノ晋照)
- 二十七日 栃木教区龍泉寺様団参
- 二十九日 裏千家県南幹事会様来山(総務快俊案内)
- 真言宗豊山派仏教青年会様被災地子供会様交流会(数珠つくり かんざん亭)
- 三十日 埼玉教区寺庭婦人会様来山(法務宏紹案内)
- 中尊寺供養願文学習会(光聰・晋照 於平泉中学校)

◇十月

- 一日 月次大般若(本堂)
- 第二十二回平泉町社会福祉大会(執事長 於武蔵坊)
- 元若手県知事増田寛也氏ご夫妻来山(貫首挨拶)
- 二日 慈眼会(本堂)
- 四日 中尊寺供養願文学習会(光

- 五 日 貫首 講話(日本認知症協会全国大会 於盛岡マリオス)
- 六 日 慈覚大師報恩法要(本堂)
高見盛引退振分襲名披露大相撲(参与邦世 於両国国技館)
- 九 日 東京教区第三部様団参
天台宗特別褒賞受賞記念講演会・祝賀会(貫首 於天津プリンスホテル)
- 十 日 東京教区第六部様団参
妙法院菅原信海門主米寿記念祝賀会(貫首 於ウエスティン都ホテル京都)
- 十一 日 北総教区如来寺様団参
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
平泉観光協会理事会(執事長 於観光協会)
- ◇十一月
- 一 日 秋の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要
稚児行列
郷土芸能奉演(一関 市野々神楽)
郷土芸能奉演(一関 行山流舞川鹿子躍)
- 二 日 菊供養会(本堂)
お経を読む会(貫首)
郷土芸能奉演(胆沢 朴ノ木沢念仏剣舞)
- 三 日 中尊寺能「狸々」、謡・仕舞(平泉保育所・幼稚園児、一関・平泉喜校会奉納 能舞台)
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛剣舞/江刺 行山流角懸鹿躍/平泉 達谷窟毘沙門神楽/胆沢 行山流都鳥鹿踊)
- 六 日 東京教区第一部様団参
写経奉納式(本堂)
菊まつり表彰式(大広間)

- 十二 日 サンマリノ共和国駐日特命全權大使マンリオ・カデロ氏来山(貫首挨拶)
- 十四 日 慈覚大師本堂ご遷坐閉幕法要(本堂)
(財)台湾観光協会主催第二十一回台北国際旅行博(十九日、総務晋照 於台北世界貿易センター)
- 十六 日 東京教区第七部様団参
東京西北ロータリークラブ様来山(貫首挨拶)
- 十七 日 日高神社火防祭保存会様
- 十九 日 鳥海柵国指定史跡登録記念式典(執事長 於金ヶ崎町)
東日本大震災物故者追善回向月命日法要(本堂)
埼玉教区瀧岸寺様団参
東京赤坂ライオンズクラブ様来山(貫首挨拶)
天台会御逮夜(結衆勤 本堂)
天台会(御影供 本堂)
仏教文化研究所研修会(講師 菅野文夫氏)
貫首 講話(平泉町地域婦人団体協議会リーダー研修会様)
村田林蔵氏来山(貫首)
駐日米国大使キャロライン・ケネディ氏来山(貫首案内)
二十八日 天台宗海外開教四十周年記念特別シンポジウム(貫首 於宗務庁)



- 二十 日 「日高囉」奉納演奏(本堂)
白虎稲荷祭礼
菊まつり開闢法要
お経を読む会(金剛院)
- 二十一 日 山形和光院様団参
栃木県仏教会様来山(貫首挨拶)
- 二十二 日 東京教区第四部様団参
毘沙門堂修復事業落慶法要(執事長 於毘沙門堂本殿)
- 二十三 日 東京教区第五部様団参
- 二十六 日 超小型モビリティ運行事業
オープンニングセレモニー(総務快俊 於平泉駅前広場)
- 二十八 日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 二十九 日 トヨタ自動車東日本(株)名誉顧問
内川晋氏他来山(貫首)
- 三十 日 東京教区第二部様団参
静岡市議会様来山(総務快俊案内)
- 三十一 日 讚衡蔵運営委員会
東京教区第八部様団参
浄土宗大阪教区教化団様団参

御奉納者 御芳名

一 菜種油 三斗

平泉町 平泉なのはな会様

一 本堂正面紫紋幕一張

一関市 一関信用金庫様

一 本堂表門紫紋幕一張

平泉町 平泉観光レストセンター様

平泉レストハウス様

平泉文化史館様

一 本坊大玄関紫紋幕一張

一関市 コンカツ印刷(有)様

一 不滅の法灯免震シート一式

愛知県 株式会社 安震様

浄財御奉納者 御芳名

平成二十四年十二月～平成二十五年十一月

海鋒 守様 五十万円

(有)平泉観光写真社様 三十万円

立正佼成会盛岡教会 教会長 長谷川泰弘様 三万円

立正佼成会花巻教会 教会長 岩間由記子様 三万円

念法眞教 総本山 金剛寺様 五万円

浄土宗 岩手教区様 五万円

(株)佐々木製菓 代表取締役 佐々木健三様 五十万円

神奈川県 安田悦郎様 十万円

立正佼成会花巻教会 教会長 岩間由記子様 五万円

光禅寺様 十万円

石堂寺 坂本英海様 五万円

泉養寺 菊池暁昇様 三万円

藪内幸雄様 十万円

東京都 本寿院様 三万円

(有)香希画廊様 三万円

むさし府中 明るい社会づくりの会様 五万円

叡南 覺範様 三万円

群馬教区 寶禪寺様 三万円

最勝寺様 五万円

群馬教区 天王院様 六万円

裏千家淡交会 岩手南支部様 二十万円

福聚教会 福島本部様 三万三千元

比叡山延暦寺 叡山講 福聚教会様 五万円

鈴木克子 発掘調査員鈴木尚様長女様 三万円

岩本美佐穂 気功・太極拳奉演様 十万円

実光院 天納様 三万円

真如堂 理正院様 三万円

文化の会会長 武田一広様 三万円

長命寺 小林昭寛様 五万円

山田泰枝様 五万円

野口様 五十万円

(有)千葉恵製菓様 十万円

東京西巣鴨 轍旅行会 正法院 田島章成様 三万円

佐藤芙蓉様 十万円

浄土宗 願行寺様 三万円

最勝寺様 三万円

千葉県 金指 潔様 五万円

菅原幹雄様 五十万円

立正佼成会墨田教会 教会長 齋藤高市様 三万円

普門寺様 十万円

正覚院様 三万円

京戸様 五万円

浅草寺様 五万円

神奈川県 安田悦郎・好子様 十万円

天台宗埼玉教区 寺庭婦人会様 三万円

天台宗東京教区様 十万円

天台宗東京教区第六部様 三万円

表千家岩手県支部様 十万円

千葉県 如来寺様 三万円

東京西北ロータリークラブ様 三万円

日光山輪王寺 菅原栄光様 三万円

東京教区第五部様 三万円

浄土宗大阪教区教化団様 五万円

池田宗容様 五万円

国立音楽大学附属高校 第十三回生クラス会様 三万円

成就寺様 五万円

圓通寺様 五万円

天台宗東京教区第一部 白業会様 三万円

NHK学園様 三万円

瀧岸寺様 三万円

水沢市 法泉寺様 五万円

水戸市 長福寺様 五万円

一関信用金庫様 三万円

東雲寺 山田亮清様 五万円

全国浄土宗青年会様 三万円

(順不同)

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成二十四年十一月〜平成二十五年十一月

平泉町 川嶋印刷(株) 菊地慶矩様 十万円

中野区 中村武司様 七万五千元

和泉市 辻林正博様 六万円

花巻市 高橋英児様 四万円

宮城県 小山利男様 三万五千元

富谷町 新市区 (有)シー・エヌエス様 三万円

一関市 (株)東北鉄興社様 三万円

一関市 埼玉信用金庫様 三万円

一関市 (有)豊隆軌道様 三万円

近畿日本ツーリスト熊谷支店様 三万円

銚子市 (株)イクオリティー 石毛裕行様 三万円

平泉町 一関信用金庫平泉支店様 三万円

盛岡市 光羽建設 伊藤光明様 三万円

栗原市 (有)金成工務店様 三万円

大崎市 佐々木則雄様 三万円

奥州市 佐々木 久様 三万円

一関市 山平様 三万円

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

平成二十四年十二月〜平成二十五年十二月

平泉町 川嶋印刷株式会社様 一基(スチール製)

一関市 炉ばた一八 渋谷正幸様 三万円

栗原市 菅原君子様 三万円

一関市 (株)精茶百年本舗様 三万円

平泉町 千葉製材所 千葉芳美様 三万円

盛岡市 中村京子様 三万円

八幡平市 藤根裕子様 三万円

(株)藤電気様 三万円

宮城県 山口 昇様 三万円

南三陸町 笹山まり子様 二万一千元

福島市 野口芳子様 三万円

盛岡市 (有)ベル美容室 高橋紀美世様 季每御供物

大仙市 米沢 励様 季每御供物

二戸市 松原晴樹様 季每御供物

新潟市 工藤一男様 季每御供物

青森県 赤川優良様 三万円

南部町 藤枝恵枝子様 季每御供物

横手市 藤枝恵枝子様 季每御供物

▽ 慈覚大師様の御縁で開催した念仏会では、数百名にも及ぶ多くの方々に念仏の輪に加わっていただき、御縁を結んでいただきました。知らない方同士がお互いに声を掛け合い、輪を作って一心不乱に御念仏をお唱えする姿が印象的でした。念仏の「輪」が人の「和」をつくり、そこにいる人々に笑顔をもたらしていたことを嬉しく思います。

▽ 東日本大震災より三年。三陸郷土芸能の奉演を通して感じる三陸被災地に連綿と受け継がれる心の歴史、震災を経験してもなお変わらぬ郷土愛にはいつも敬服いたします。それはまさに「心の伝承」が築いた三陸の宝に違いありません。

▽ 御寄稿いただいた皆様、またお力添えをいただいた皆様に感謝申し上げますとともに、この度の寺報編集中にご逝去された小高先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(破石晋照)

寺報「関山」は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひ利用下さい。(http://www.chusonji.or.jp/)。

中尊寺(寺報)「関山」第十九号

平成二十六年(二〇二四)三月一日

発行 中尊寺

(執事長 清水広元)

〒〇三九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)



西行・芭蕉も愛した風景



〈発行 中尊寺〉